



贈

求道

第一卷
第三號



求道第一卷第三號

目次

- ◎父の示寂によりて教へられし
眞實證の靈境 近角常觀 和鼎
- ◎戰時修養論 和鼎
- ◎日曜講話
- ◎表裏相應 石川成章
- ◎宗教的自信と外戰 近角常觀
- ▲新刊紹介▼
- ◎社會事業 池山榮吉
- ◎同一鹹味 百目木劍虹
- ◎信仰の力 鈴木卓苗
- ◎無題錄 仁科幽黯
- ◎大靈の光 一記
- ◎南村閑話 近角常觀
- ◎予か宗教的實驗 近角常觀
- ◎毎月教壇

風尚餘韻

- ◎求道賦
- ◎孤雲
- ◎釋尊降誕の日に
- ◎草衣

びくろん
檜尾沾泉
波岡茂郎
十郎

◎日曜講話◎彰化學堂◎編輯餘録

政教時報

日曜講話

毎午時開
一日前
九時

求道學會

(木郷川一)

土曜講話

毎土曜
午後二時開

第二求道會

(九段坂)

求

道

第一卷
第三號

父の示寂によりて教へられし眞實證の靈境

求

我今實に父の喪に在り、筆を執りて文字を作るあたはず、亦他事を語るを好まず。我は吾父の最後に於て示し玉ひし眞實證の靈境を描きて、一は慈親の恩徳を感謝し奉り、一は同信の人々に告げ參らせむと欲す。我は明らかに告白す。我は父の常に教へ玉ひし導きによりて眞實の行信を味ひ、且暮佛陀の光明に浴することを得たりと雖、猶人生の雲霧に覆はれて、未だ親しく涅槃の佛日を拜するを得ざりき。然るに今や吾父は寂を示して、人生に於て決して經驗し得べからざる死の關門を通過し、我を伴ひて半身に於て慥かに之が實境を味はしめ玉へり。人生の幕の撤せられたるの時、我は親しく内殿の光明を一瞥し奉るを得たり。極樂の東門自ら開きて吾父の遙かに迎へ入れられ玉ひしの時、如來法王の莊嚴、正覺華中の眷屬、如何に麗はしきかを歴々として覺知せしめ玉へり。護持養育、生前山嶽の洪恩を荷ひて、哀愍難受、滅後遠く嚮導の燈明を仰ぐを得たり。臨終幾多の慈訓を遺して、猶身を以て眞證の靈境を示し玉ふ。徹頭徹尾慈悲を以て終始し、身盡くるも心盡さざるものは洵に慈親の大慈なる哉。今や雨窓燈下遺像の側に侍して、生前愛讀の聖教を繙く、峽裏宗祖聖德太子の奉讀を書寫し玉ひ、且つ文松子傳を引きて曰。涅槃經に言く、如來は一切の爲めに常に慈父母を作り玉へり、當に知るべし、諸の衆生は、皆是れ如來の子なり、世尊大慈悲、衆の爲めに苦行を修し玉ふこと、人の鬼魅に着せられて、狂亂して所爲多きが如しと。實に父の一生は身を以て此意義を體現し玉ひし者。兒心哀々坐ろに慈光の極なきに仰嘆して、泣かむと欲して涙出づるところを知らず、書かむと欲して筆を下すところを知らざる也。唯ありの儘に吾父が安らかに往生の素懷を遂げ玉ひし有様を寫して、大涅槃山に入り

道

(一)

玉へる佛日の靈光を仰ぎ奉らむとす。

吾父は多年喘息の病と又常に安らかに眠り玉ひて長き間醒め玉はさる持病あり。頭を回らせば今より十年前に於て三日眠り玉ひし事あり、舊臘一夜亦此境に陥り玉ひし事あり。本年三月四日少しく氣色悪しかりき、然れども十五年來日課とし玉ひし自ら佛供米を一粒づゝ選り玉ふことは廢し玉はず。又毎夜就寤前に特に全家族を率ゐて佛前に禮じ、懇ろに稱名念佛して廣大なる恩徳を感謝することを以て、殆むと不文の家憲とし玉ひしが、此日も亦常の如く之を行ひて獨り早く寤に就き玉ふ。父は平素佛を崇敬し玉ふこと最も恭肅佛前の灑掃は決して他人をして爲さしめ玉はず、朝夕の勤行の如き、如何なる事ありと雖、決して時を誤り玉ふなし。五日不快遂に床に就き玉へりと雖、猶勉めて堂に上りて朝夕勤行を爲し玉ふこと常規に異らず。六日遂に持病に陥りて昏睡し玉ふ。七日醒め玉ふ、然れども、喘息頗る悪し。醫師來り診して曰く輕き肺炎の初期なるべし、數日を経なば病症漸く知るを得むと。此日一切食し玉はず二十年ぶりにて顔を擦して服藥し玉ふ。八日從弟來りて病床を見舞ふ父願みて言はく『此度はイツモとは様子が違ふ恐くば起つことむつかしからむ』と。母及び弟愛ふること頗る深し、醫師は尙早しと言ふに拘はらず同夜私かに電報を我に送り、後之を父上に告ぐ、父言はく『突然電報を打つは少しく早やかりき、東京は定めて忙はしかるべきに』と、然れども打電し終れるをきゝて頗る喜び玉へる趣ありき。時に予求道學舎に在りて一兩日最も閑なりき、八日夜十時半電報着す、一見忽ち覺悟する所あり。以爲らく、嗚呼江湖二十年、孝養を缺き、兒心日夜切に今日あらむことを憂へたりき。今や實に一生中最も悲むべき時來り矣、何事も佛陀の力に任せ奉らむ、父上の深く法を喜び玉へるは何よりも心丈夫なれども、冀くは今生の暇乞として一刻も早く生前父上の病床に侍して最後の慈訓を享くることを得むと。忽にして隣なる親友荻野兄の見舞ひ玉へるあり。兄及び百目木君の助を得て行李を收め、徐ろに不在中の事を託し、自ら趨りて本郷郵便局に到り返電す。時に夜正に高くして街頭寂として聲なく、月影凄涼にして千里遙々兒心飛びて父上の病床に在り唯佛陀の矜哀を仰ぎて、坐ろに慈光の身に浸むを覺わたりき。未明學舎の人々猶未だ覺めざるの時、父の病に依て歸郷の事と益々互に修養を深くすべきことを書きて之を壁に糊り付けて出立す。父上の好み玉ひし菓子及び珍らしき菓實など色々調へて瀛車に乗る、瀛車速力の遲さを感したる未だ此時の如く甚しきはあらず。

此時父上往生の覺悟は驚くべき確實なるものなりき。弟を顧みて言はく、『此度ころは往生の本懐を遂ぐることに過ぎたる喜はなし、よし萬々一生きのびるとも稱名申すに損はなし、稱へ奉らむかな、かゝる時節なれば葬儀はなるべく質素に營めよ。常觀あらば共に謀るべきに不在にては不便なり、茶も煙草も好ましからず、世の物一切今や凡て味なし、唯朝事を勤めざるは勿躰なき事なり』と。殊に此勤行の一事は最も懸念し玉ひしもの、如く、談話中常に帶させよ、足袋はかせよ佛に詣つむとて頻りに求め給ふ。九日未明には夢か幻か、床中立派に阿彌陀經を拜讀し玉ひ『十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし攝取してすてされば、阿彌陀となづけたてまつる』と云へる和讃を引き、後に『光顔巍巍』の偈文までも誦し玉ふ、聴くもの皆歡喜の涙に咽はざるはなし。既にして我が返電着す、父忽にして醒め玉ひ、大に喜び、自己の病苦を忘れて兒か身上につき語り、大に心を安んじ玉ふ。醫師來りて輕快なりと診す、されど漸次病苦進むに隨ひて、益々佛力の確かなるを喜び玉ひ、病中常に懽爾として笑み玉ふ。母問ふて言はく、此の如く呼吸切なる時何故にかくまでも笑み玉ふやと父猶益々笑みて答へ玉ふ是屈托なきの證なりと。弟曰く、生くるも死するも佛の御思召にはあれど力の續くかぎり養生を怠る可らず、我慢し玉ひてよと言ひしにさる耻づかしきこと言ふべからずと應へ玉ふ。信徒の病床を見舞ふものに對して切りに信心の物語を爲し玉ひ、『唯何事の計ひもなく、御佛の御計ひに任せ奉りて、助くるとある御呼聲に従ひ奉りて稱名念佛するが何より樂しき事よ』と述べ玉ふ而して病苦煩悶甚しきが中に出征軍人の辛苦、本山改革の結果など案じ玉ふ。日清戦争の時敵も味方も爲めにとて毎朝特に長く讀經し玉ひしが、日露開戦の後も亦始め玉へり、されど老境に及びたればとて阿彌陀經に止め玉ひき。十日曉夢中讀經し玉ふこと昨曉に異ならず、朝來恰も氣爽かに病愈るの時予車を飛ばして家門に入る。

父上仰臥し玉ひ、我趨りて病床に就き、弟喜ひて迎へ、母枕頭に侍してア、よき時なりしとの玉ふ。トモカク此の如く一家打揃ひたるは全く佛祖の御冥助なりとて一同口を揃へて佛恩の廣大なるを感謝し奉る。父上の喜譽ふるに物なく、病輕快なりとさして我復少しく安んずるを得たり、幾度覺悟するも覺悟出來ぬは洵に親の終なる哉。直ちに長濱病院長を招かしめ、行李を

解きて先づ舊臘新法主臺下の御病床に伺候せし時、賜はりたる短冊を拜見せしめ奉る。其句に曰く。

水仙の香んばしき夜や枕上

句 佛

と父上目を凝らし眼鏡を呼びて、幾度となく拜見し喜び玉ふ。予か身上、求道會館、本山改革の事など、頻りに尋ね玉ふ。一々答へまつりて且つ近頃東京に於ける青年信仰の氣運盛なるを叙す、父上喜び玉ふこと限りなし。密柑、林檎、乾柿、柿羹甘など、何れも少しづつ食し玉ふ。既にして懇々として言はく『たのむものを助くると云ふ仰せには決して間違はなきゆゑに、唯大願業力の手丈夫なる方に任せ奉るより外はない……』念佛もろとも懇話時あり、語々穩かにして言ふべからざる味あり、確かにして安らかなる人生の人の言とも覺えず、嗚呼是れ生ける慈父の口より傳へ玉ふ如來慈父の御教也、溫雅和樂の靈語今猶歷々耳に在りて忘るべからず。衆皆醒覺の度に過ぐるを憂ふ。予乃ち安眠せしめ奉らむと欲し、予も亦枕を並へて共に眠るを擬す、予過て眠に落つ、父上予か顔を撫て予か手を執り、却て予を醒ましめ玉へり。夕刻に到りて病果して惡し、院長來り審かに診して危篤なりと宣告す。翌十一日は正さに是れ父上先考の祥月命日也。父上六歳の時に逝去し玉ひ、爾來今年に至るまで六十年なり。實に父寺に住職たること滿六十歳、江州北三郡中其比を見ずといふ。蓋し一人にして三代在職の務を爲し玉ひし也、幼時父を失ひ玉ひし後、たしかに一代の分を勤め、壯年に至りて自己の一代を終へ、老境に及びてたしかに兒が爲すべき一代をも勤め玉ひし也。噫哀々我を生みて劬勞し玉ひ、貧苦中久しく我を學ばしめ玉ひ、老衰後猶我をして遠く遊ばしめ玉ふ。而して自ら杖きて踰跽として行き、我に代りて法務を勤め、且つ一代深く信心を勸め玉ふ、平素父の感化を被り、臨終教を受けて喜びて往生せしもの數を知らず、予等兄弟二人ありて共に他に遊ぶ天下實に此の如き不孝あらむや。予か傳道興學の事に従ふ、父か寺務に忠實なるがすが一にだも及ばず、慚愧言ふ所を知らざる也。嗚呼父は身を以て如來の大慈を示し玉ひしなり、行を以て利物の大悲を教へ玉ひし也。予は實に父に對して罪あるのみならず、佛祖に對して恐懼措く所を知らざる也。嗚呼父上の職に忠實たりしは實に我一生に對する不言の鞭撻なり、父の質素たりしは實に我生活に對する生ける規箴なり。病篤さに臨みて言はく『我死なば誰でも住職をしてヲクレ』と此一點は遊子千古の恨事、斷腸言ふ所を知らず。かくの如くして

在職正さに六十年に滿ち、恰も先考の忌日に會す。人皆沈黙の間に殊に此一日を恐る、初の醫師來りて亦危篤なりと診す。此日嘆語最も甚だし、時に奇警の句ありて素撲味深し、『人間の爲すことは何事も名利なり』と云ひ、『金鉢坊主と云ふものは根性の惡ひもので、常觀などもドットせぬじや』などの玉ふ、深く銘すべき訓戒なり。殊に卒然頭を擧げて予に向て『オマへはマダ娑婆が捨てられむか』と宣ひし時は、實に一言予か肺腑を貫き法電閃めき全身忽ち撃たれたるの感あり。父は平素偽善を嫌ふこと最も甚しく、堅實眞摯の權化と云ふも過言にあらざるが如し。此の如きの人、大悲の心を宿して、此の如きの時、而も無意識に口を開く、我未だ此時の如き遠慮なく滯なき眞面目を見たることなし。此の如き性なるが故に、嘆異鈔は父の最も愛讀暗誦し玉ひし聖教にして、屢々他に之を語り玉ふこと予が幼時より己來記憶する所なり。殊に常に誤解に陥り易きを戒め玉へり。一昨年御正忌の際、本山に參詣し、喜色滿面歸宅し玉ふ。時に我求道學舎來集の諸君に寄する爲め、嘆異鈔の一節につきて所感を披瀝するの書を認む。一氣呵成中途にして筆を止め、父上の前に出て、之を朗讀す。父上言く『アリガタシ能く出来た、其己上に書く勿れ』と予退きて猶少しく加へむと試む、果して蛇足誦するに堪はず、乃ち父の言に隨ひ奉りしことありき。予は告白す、我信仰は全く父上の授け玉ひし所也。病益々劇し、兒父上に向て曰く『助けて下さるのが難有イナ』と父上今は既に舌剛ふて辨ずべからず、されど猶『助かられぬものを』と冠らせ玉ふ。兒覺せず聲を放ちて感泣す。嗚呼此一語大悲の極致、救済の至極なり。殊に此日夢中讀經し玉ふこと最も甚だしく、阿彌陀經を誦すること前日の如く、偈文の如き之を誦すること三たび、日暮れむとするに及び頻に燈明を上げしと命し、母我及び弟の手を固く握りて之を動かして罄に擬し、恭しく正信偈を誦し玉ふ。氣息頗る切なるを以て見るに忍びず、心ならずも之を中止せむと欲して食を進む、忽ち之を飲み了りて又恭しく初より之を誦し、遂に正しく念佛三首引の勤行をなす玉ふ。和讃は『五濁増のときいたり、疑謗のともがらおぼくして道俗ともにあひさらひ、修するをみてはあだをなす』と云へるを一度、又『信心の人にちとらじと、疑心自力の行者も、如來大悲の恩をしり、稱名念佛はげむべし』といへるを幾度も反覆し玉へり。回向文を終りて大聲喜びての玉はく『ア、御苦勞御法事か濟んだ』と安んじ玉ふ。是先考没後滿六十年祥月命日日暮れむとするの時、瀕死の人が無意識に言ふ所、一族皆感泣す。

十二日は安らかに眠り玉ふ。午前醒め卒爾として我を顧みて問ひ玉はく「イヤラ稲田に参詣したるとき拜したる墓は。何
ンと云ふ尼様のたりしか」と、我應へて曰く「ソは玉日君が剃髪し玉ひて惠信尼と名け玉ひし方なり」と。此問は頗る兒をし
て驚かしめたり。舊臘十八日我京都に往きし時、親鸞聖人及び玉日君の舊跡なる、五條西洞院華園殿に詣し、又華園文庫なる
書を得たり。中に親鸞聖人御臨末の御書二通及び玉日君遺言狀を收む。何れも簡潔にして淨土を眼前に拜し奉るの感あり。折
あらは示し奉らむとて齎らして歸る。今や不思議にも惠信尼の事を尋ね玉ふ。乃ら機逸すべからずと爲し、直に耳邊に於て之
を拜誦し奉る、知れる人多からむも此際いかて之を書かて止むべき、曰く。

○御臨末之御書

愚禿年つもり病に犯され候間追付往生の本意を遂べく候、今は唯極樂の蓮臺にて一味の衆中を相待
ばかりに候。あなかしこく

弘長二歳十一月

親 鸞

○又

我歳さはまりて安養淨土へ還歸すといへども、和歌の浦の片雄浪のよせかけく歸んに同し、一人
居て喜は、二人とおもふべし、二人寄て喜は、三人と思ふべし、その一人は親鸞なり

我なくと法は盡まし和歌の浦、あをくさ人のあらんかぎりは

弘長二歳十一月

愚 禿 親 鸞
滿九十歳

西 念 御 房

○玉日君御遺狀

我身事前日より何とやらん心あしく候、病は死のたよりに候へばひとしほ御慈悲の程たのもしく候。

定て身の終と存候、紀念の爲書殘し候。誠に凡夫の習なれば憂事多く候べし、かゝる身なればこそ
諸の佛にも見放され候ひしを、彌陀佛の救ひ玉はんとて此身一人の往生をかけものになされ、正覺
ならせ玉へは、如來の御姿こそ我等が往生の疑なき證にておはしまし候へば、必ずく御過有まじ
く候あしきこゝろ起り候は、彌尊み稱名いさみ玉ふべく候、是より外は身の喜御座なく候。

親鸞の仰も外の事候はず、はからずたゞ稱名喜ぶ計りに候、別に珍しき事候は、ながき御別と存候。
御信心にかはりなき人には淨土にて蓮の對面申べく候、かしこ。

九月十六日

尼 惠 信

友とちの人々

父上は耳を澄まして之を聴き玉ひ、頗る感動し玉ひしもの如く、不自由の身を以て、本を取りて頻りに之を反覆し玉ふ。
我乃ち再ひ初めより靜かに拜讀し奉る、父上靈感面に溢れて莊重恭敬の態度益々著し。遂に眼鏡を呼ひて三たび自ら拜讀し玉
ひ、特に「今は唯極樂の蓮臺にて一味の衆中を相待ばかりに候」と云へる御文に眼を附けて、之を拜讀し玉ひ、恰も胸より湧
き出つるが如き聲を以て力強く歡喜の念佛を申し玉ふ。是ぞ祖師直々の御化導を蒙らることよと、傍に拜しつゝ、形容し難
き神聖なる感情胸中を塞ぎ來りて、隨喜の涙禁し難し、暫くして念佛しつゝ、すやくと安らかに眠り玉ふ。

十二日午後四時頃、初の醫師來診して去る。父上頗る醒覺し玉ふ。一族周圍に集る。各人に對して別々に適切なる訓戒を無
意識に與へ玉ふ。平和沈靜なる恰も平常の團樂の如し。父上頻りに口を開き喜色身に溢る。予「如何に喜はしき御事よ」と云
ひしかば、「諸根悅豫也」と應へ玉ふ。諸根悅豫、嗚呼此語は一昨年三月兒か長崎へ歸着の電報を受取り玉ひし時、其喜を寫し
玉ひし言也。當時隣人其情を尋ねしに、「身體中が嬉しむ」との玉ひしとか。今や實に病中にも拘はらず、喜溢れて肉動かむと
す、恐くは我等傍人の見るべからざる境の現前するなからむや。回顧せば一昨秋父上が頗る衰へ玉ひ危かりし事ありき。我急
に促されて歸郷せし時、愈々最後なりと覺悟し、當時東京滞在の新法主臺下に伺候し奉り、父に代りて私かに一言最後の御諭

を請ひ奉る。臺下親しく懇ろに諭し玉ふ。幸に其時父の病癒へたりしが、爾後日夜殊恩に感泣して御諭を眷々服膺し奉り。身に餘る喜なりとて、所謂躍り上るが如き心地にて頂き玉へり。其御諭に宣はく。

夫人世のはかなき事は風前の燈水上の泡の如し、ゆめ／＼油断すべからず。かるがゆゑに浄土真宗の勸化は平生業成の信の一念にて往生の得否は定るものなり、これ皆彌陀他力本願の強縁にもようさるゝ事とこゝろへきなり。其上此世滯留の間は報佛恩の爲めの稱名念佛は勿論、爲法不爲身の心掛專一たるべき事なり。

一、眞諦門の御勸化をうかゞうには歎異抄を拜見すべし。

一、俗諦門の掟を守るには、蓮如上人御一代問書を拜誦すべし。

散る時が浮む時なる蓮かな

明治壬寅歲十一月第七夜

彰 如

慈愛なる善知識より此の如き剗切なる御勸化を被り、父上平素泣き玉へり。此時兒は此御諭を取り出て、父上に向ひ、『是が分りますか』と尋ね奉る。父上突然手を出し玉ひ恭しく此巻を探りて頂き玉ふこと數度。顔容安詳にして念佛の聲微かなり。兒感涙に咽びて「散る時が浮む時なる蓮かな」と高く誦し奉る。父上珠數を求めて此巻を拜し玉ふ。猶形容を以て巻を開くべきを命じ玉ふ。乃之を示し奉る。父上念佛しつゝ靜かに眠り玉ふ。時正さに黄昏。院長來診し、是安眠に非ざるべし、恐くば今夜中にて在すらむとて歸る。母弟從弟一族皆枕頭に集り、看護怠らず、稱名念佛の聲室に滿つ。父上病に罹り玉ひてより特に清淨を好み玉ひ、必ず起て厠に行き玉ふ。今や兒枕頭に侍し、念佛の聲もろともに水を以て唇を濕し奉る、父上容貌益崇高にして之を味ふ毎に必ず口を拭ひ玉ふ。忽ち身體を動かして求め玉ふもの、如し。母の勸に従ひて予膝を進めて安らかに之を枕せしめ奉る。恰も頭北面西如來涅槃の儀に協ひ、珠數を探りて合掌し玉ふ。呼吸益々切にして益々微かなり、兒感泣して叫ぶらく、『嗚呼長々の間御苦勞を掛けました、嗚呼今や安々と大悲の御迎に預り玉ふことの嬉しや』と恭しく鑿を鳴らし奉る。既に門徒信徒の馳せ集りて靜かに隣室に侍せしもの、鬨を排し悲泣して枕頭に集り來る。念佛の聲室に滿ち、恰も音樂哀婉たるが如く、父上呼吸微なるに隨ひてさながら一歩づゝ淨土に還歸し玉ふこと歷々として感じ來る。心中明らかに観ずらく、恢廓なる虚空、西方少しく下れるの處、紫雲飄蕩たるの間に「諸根悅豫」の貌を現はし、仰視し奉る我等をみるなはずと思ふ時は、膝の上に枕し玉へる父上は亦「諸根悅豫」の貌を以て終に息引き取り玉ひけり。悲泣の涙は歡喜の涙と交はり、今生の離別は忽ち俱會一處の淨土と接續し奉る。現世の慈父、永久の慈親、我は今、滿身唯感謝の念を以て充たされ、口に溢るものは報恩の念佛なりけり。嗚呼長々の間御苦勞を掛けましたが、今は安々と淨土に還歸し玉ひて、正覺華中懽爾として、遙かに穢土の我等をみそなはし玉ふ」とは當時心中の書なりけり。父上の遺骸——實に今や遺骸となり玉へる父上、が吾膝に枕し玉へる體にて臨終の時も引續きて、先日來病中常に誦し玉ひし「光顏巍巍」の偈文「信心の人」の和讃、阿彌陀經、「十方微塵」の和讃を拜誦す。阿弟從弟嗚咽聲を呑むて之に和す。母を初めとして眷屬知己門徒信徒涕泣念佛の聲間斷なし。乃ち徐ろに白衣を以て遺骸を蔽ひ、謹んで香煙を手向け、懇ろに拜禮して、今や既に喪室と變じたる病室を起ち出でたる時、廣大の世界より忽ち下界に出でたるが如き感あり、自ら願て最も驚けるは、六疊の病室が如何に廣大にして、三日の日子が如何に永久なりしかに在り、同時に心中初めて一種言ふべからざる寂寥を感じたりき。嗚呼父上今は淨土の人となり玉へり、我等は空しく穢土に居残りぬ。我は淨土に參り玉ひぬるを送り來りて、獨り再び淋しく歸り來れる心地せり。我等も一度は父上の如く往生し奉るものを。ア、父上今は唯極樂の蓮臺にて一味の衆中を待ち玉ふことの嬉しき。我は父上が最後の御供によりて、初めてあり／＼と極樂の莊嚴を心の中に拜み奉りしことの樂しき。横超他力の本願、彼土得生の妙果、今ぞ初めて明らかに知られたり。兒生來、三十二年慈父の御導きによりて初めて眞實證の靈境を経験して佛陀救濟の極を拜み奉るを得たり。

此に至りて予は雜誌の文字を書きつゝある心地はせざるなり。涅槃の彼岸に上り玉ひぬる父上に向て白す心地なり。今は何事も告白して恩徳を感謝し奉らむ。回顧せば今より十六年我西京の業を終り初めて東京に留學する時、出立の前夜深更左の一紙を認めて翌朝之を授け玉ひけり、曰く。

東京留學之心得

一 自督安心稱名報恩可營事

一 留學は佛祖善知識御恩ナレバ愛山護法忘却有間敷事

一 身心保護專一之事

一 暑寒共ニ注意スヘキ事

一 必ス他人ト異論有間敷事

一 食時ニ付随分注意可有事

一 朋友ト睦間敷乍去油斷スルコトナカレ

右之條々堅ク相守其他萬端必ス要心スベシ

明治廿二年八月四日午後一時書之

近角常觀の授與一紙

西源寺住職 親父老僧印

慈愛の情、密々にして今は一句一字益々身に入る心地とする。且子を知るは親に如かずとかや、其訓誡が如何に兒の病弊に適中せるかは予を知り玉ふ人は明ならむ。今は何事をも言ふまじ、唯慚愧し奉るの外なし。父は歎異鈔の力強き信仰を喜び玉ひし上に、御一代問書の上にはあらはれたる蓮如上人の質素なる生活を喜ばれり、愛讀の聖教中、御一代問書を繙くに、各條朱を以て簡條數を記し、左の奥書あり、曰く。

明治十七年六月下旬第四日於燈下簡條功畢

簡條每廿餘遍佛恩稱名南無阿陀陀佛

釋 常 隨

歎異抄と御一代問書を拜見せよとの善知識の佛勅、一言一句蘇々と身に浸みて喜び玉ひしも、洵に理なりけり。昔は大聖釋尊、跋提河の畔に涅槃の雲に隠れ玉ふ時、阿難尊者泣て世尊に訴へ玉はく、我等弟子今より後、何を以て如來を見奉るを得べきか、世尊怒ろに戒を以て我とせよとの玉ひしとかや、嗚呼吾父が生前かく書き遺し玉ひし慈訓と一生の間身を以て示し玉ひ

し素行とは確かに我か後半生の唯一の父上なり、洵に身盡くるも猶盡さざるものは親の慈悲心なる哉。予や回顧せば東西奔走二十年、學成るも、事遂くるも之を父上の前に陳して、満足なる恩顔を拜するを以て兒が前半生の理想と爲せしが、今や確かに人生の意義は一變せり、人生の方向は回轉せり。然れども幸に今生の慈父は如來の慈父に歸り玉ひ、昭々常住にして變易し玉ふことなし。況むや父上の親しく垂れ玉ひし遺誠と、頂き玉ひし遺教とは行往坐臥歷々明らかに耳の底に響けるものあるに於てをや。冀くは造次顛沛之を服膺して、園林遊戯の度生を仰ぎ、我等世縁の盡くるの時、諸根悅豫、亦慈父の跡を慕ひて、西岸樂土の再會を期せむ哉。

十四日茶毘を行ひ、十五日遺骨を拾ひ、十六日葬式を行ふ兒今や斬衰喪に在り、食甘からず、花色なし、爾來三週唯經を誦して追慕の意を表す。今や筆を採りて眞實證の靈境を描かむとす、文成らず、筆從はず、屢稿を起して、屢々捨つ、父の終を寫す。不遜若くば不倫の嫌なきに非ざるも、親しく兒に示し玉へる慈父最後の靈境は豈同信の友に告げざらむや。唯事實を告白するに止む、文、辭を成すの余地なし、賢察を請ふ所也。回顧せば父上華壽の時門徒壽碑を建て南條文雄師爲めに之に題し且つ銘し玉へり、乃ち今亦師に請ふて法號の揮毫を請ふ、師偶々北國巡教中也、師忽ち之を納れ、且二十四日彼岸中日、自ら來り吊し、經を靈前に誦し玉ふ。乃ち骨を墓碑の下に瘞み、師に請ひて開眼世養を行ひ、且つ追悼の法筵を開く、一郷遠近師が慈教に沐浴せざるなし。師か溫情の渥き、左の一律を賦し書して之を賜ふ。深謝何ぞ堪へむ。曰く

甲辰春分後一日追悼慈光院師

碩果 南條文雄

欽師現滅示無常。吾爲揮毫字一行。三寶紹隆多法喜。諸根悅豫攝慈光。由來廣大難思信。即是長生不死方。六十六年終世壽。留將賢子化家鄉。

三七日逮夜遺像の下にて

常 觀 識

戰時修養論

和田鼎

求

國家と國家との間に戰あるは猶個人と個人との間に争闘あるが如きか。苟くも人類の不完全なるを否定すること能はざる限りは、戦争は遂に避くべからざる、必然の罪惡として認めざる能はず。個人間の争闘も亦等しく止むべからずして起るところの弊害なりといはざる可らず。戦争を以て正理に契ふが如く云ふものは愚の極なり。

若し夫れ是を宗教的見地より看んか、戦争と、争闘と、等しく皆是れ吾人が心靈の上に於ける争闘の反影に過ぎざるなり。吾人の心居常其平靜なるに當りては未だ甚しき罪惡の念の兆すことなしとするも、一度事によりて其調和を失ふに當つては、貪婪飽く事を知らざるスラブ民族のその如き畏るべき心情の惹起するを禁ざる能はざるなり。否寧ろ、より甚しき心情の時として吾人の道念を打敗りて凱歌を奏せんとするが如き危険を實驗すること少からず。吾人は少しく事物の理を解し善惡の判別力を有するに於て、常に僅かに之を征伏して漸く平靜の思に歸り、密かに其心情の經過を顧みて悚然として膚に粟するを禁ざる能はざること、また洵に少しとせず。よし、之を形の上に表はすに至らずとするも、吾人の

第

三

號

の上に實現せられつゝあるに非ずや。商人は珠盤を取つて商業界の上に戦ひ、學者は筆を採つて學界の上に戦ひ、工業者は機械を以て工業界の上に戦ひ、農は即ち鋤鋤を採つて生産界の間に戦ひつゝ、所謂る平和の戦なるものは到處に之を目撃することを得る也。戦は必ずしも銃劔を採て砲火の間に見ゆるの現象とのみはんや。

是の如く觀じ來る人生は畢竟是れ一大戦争の修羅場といふべきものに非ざるなからんや。其時に調和平靜の面影を見るが如き事あるも、是れ遂に永遠の平和に非ずして一時的の平和なり、恒久の靜平に非ずして夢幻的の靜平なり、佛教の人生觀がこの人生を以て猶ほ火宅の如く何處の邊にか安住の地を求むべきといふもの洵に至言なりといはざるべからず。吾人は常に心身の平和を求めて止むときなし、然も三毒の煩惱は絶へずこの平和を擾亂し攪拌しつゝ、痛恨なる戦を開きつゝあり。春風春雨よく花を開き人をして長へに其長閑なる花下に弄されんとするか如きも、春風春雨またよく花を散らして人をして悵然として行く春の名残に袖をしぼらしむ。三春の行樂畢竟夢の如し、永遠の春は遂に得て望むべからざるなり。春海の平和また暴風の掀翻を免かれず、社會百般の人事現象に於ける争闘の面影の如きまた文明の進歩と共に益々其甚しきを致しつゝあり。見來れば人生は真に一大戰場たると共にまた一大迷宮の如き不可思議の境といはざるべからず。

心裡には諸種の罪惡を敢てすべき可能性を有するものなるは争ふべからざるの事實なりとす。是の如く觀じ來らば個人と個人との争闘は即ち是れ吾人が心中に於ける争闘を形に表はしたるに過ぎず。國家と國家との戦争もまた又吾人が懷慮の戦を實現せしめたるものに非ざるなからんや。戦は必ずしも之を日露の間にのみ存するの現象といはんや。

就て之を自然界の現象に見よ、茲處にもまた平和と戦の二面ありて存するを了せん。春海浪平かにして激瀾鏡池の如く白鷗の眠靜なるの狀は、洵に是れ天が吾人に示すところの平和の面影に非ずや。然かも颶風飄として一度其怒號の勢を逞ふするに當りては、平和の面影は忽ちに變じて激浪怒濤の天に冲するが如き凄絶の光影を呈するに非ずや。是の如きは是れ自然界に於ける一大戦闘なり。陽春三月花咲ひ、鳥歌ふの好季節眠るが如き霞の空は真に是れ飄々たる平和の姿に非ずや。然も暴風一過するところ四面暗晦怒號の叫び凄まじくさきに花下に弄されて春の日の暮るゝを悼みたるの人をして轉た生色なからしむるに至るものは、寔に是れ天地の一大破壊力を示すものに非ずや。戦は必ずしも人事界の現象とのみはんや。

更に眼を轉じて社會現象の上に見よ、茲處にもまた不斷の戦は演ぜられつゝあるを知らずや。其自覺するものとせざるものとの論なく、激烈なる生存競争の戦は日々夜々に人類に死するもの、特に戦時と稱すべきもの、存在を認めざるなり。然れども是等の戦の中に於て其最も甚しき不調和と、悲慘と損害とを引き起すものは、即ち國際間の破裂に於て生ずる戦闘なりとす。故を以て戦の名は遂にこの般の争闘に向て最も適切なる稱呼なりとせられ。戦といはゞ直ちに銃劔を取つて彈丸雨飛の間に勝敗を決するの謂なりとせらる。是の意味に於て之を見れば戦の未だ起らず列國親交といへる外交的辭禮の存する間は之を平時といふに於て未だ其不可なるを見ず。吾人の今特に戦時修養論といふ所以又實にこゝに存す。宗教上の見地よりして之を見る戦争は必ずしも珍らしき現象として映らず。從て戦時に於て特に修養の必要を論ずるの要なしと雖ども、社會一般の上より之を見れば此際特に一番の覺醒を呼來らざるべからざるものあるを感せずんばあらざるなり。

人生は戰場なりといふ。然も人はこれによりて痛切に其意味を感じ來つて一大覺醒を起すか如きは極めて稀なり。雷夫れ敵と味方と陣頭に相對峙して鋒を交ふるに當りては彈丸雨の如く飛び、劔の光閃々として人の心膽を寒からしめ、戦友の左右に倒るゝか如き慘狀を目撃し、若くは之を耳にするに當りては、人はこゝに初めて一種いふべからざる感想を生

せざる能はず。壯烈凛として千古に冠絶する廣瀬中佐の勇ましき最後の如きは恐くは是れ吾邦の史乘に於ても未だ嘗て見ざりし壯絶勇絶の光影に非ずや。部下の士卒か恰も慈親の如くに愛敬したる其人は管一發の敵弾に中りて、僅かに一片の肉塊を片身として倏忽として其影を永遠に失ひたる如きを見開するもの、誰れか又一種の不可思議の念に打たれざるあらんや、人の中佐を呼んで軍神の化現といふもの洵に故なしとせず。當時万死に一生を期せず、共に與に偉大なる任務に服して其功を成したる中佐か部下同船の士に至りては果して如何の感ありしか。管吾人は之をさき、之を想像するに當りても、猶ほ且つ一種の感に打たれざる能はず。戦の未だ初まらざる恐くは未だ吾海軍中この壯烈なる武夫あるを知らざりしもの多からん、一度決死隊の事ありてより天下萬衆等しく皆眼をうばだて、其武比の驍勇を賞するに至る。未だ月餘ならずして其人倏忽として滅ず、何ぞ其來るの速かにして、其去るの更に速かなる。軍神の吾士氣を鼓舞せんが爲めに假りに姿を中佐とあらはしたるに非ざるなきやを思ふもの、決して理なきに非ずといふべし。中佐の肉体は滅すと雖ども其英魂は長へに軍國の摸範として千古に赫々たるものあらん。斯の如きは戰場に於てのみ初めて見る事を得べき現象にして、其人心に與ふるところの感動の最も大なるものと爲さざる可らず、生ける實例が吾人に與ふる所の教訓はまた生氣に満つ、

往來して死に對するの實驗を十度し廿度したるもの、其態度の眞摯なる其問答の要を得て直ちに人の肺腑に入るが如きものありしは、蓋し皆其死の實驗にのみ來りたる修養の効によらずんばならず。吾人之を知る老將軍にさき、馬を陣頭に立て、敵彈に面するの時、心中一點の私慾あることなく、富貴も、名譽も、腕力も何ものも一として頼みとするに足らず、只一つ吾心あるのみと。實驗の話として大に趣味あるを覺ふ。古の名將と稱せらるものは等しく皆死の實驗によりて修養を積みたるに外ならざるなり。

今や身親しく戰場に趣きて、敵彈の面に立つ吾親愛なる軍士と、止まつて後顧の患なからしめんとする國民と共に、皆この生ける警誠の德音にさきて、覺醒一番心靈の修養を計るべきの時なり。人生は戰場にして然も今や戰爭中の戰爭なり。是豈に凡ての方面に於て吾人が修養を計るべきの好時代に非ずや。

兄よ、予は病みぬ。然れども時局は予を病んで病軀を掲げて軍に従ふべく余儀なくしぬ。サヨナラ!!
今に及んで何等いふべき事なし、予は予がベストを致さん、兄等は兄弟等のベストを致されよ。

劍虹 兄 踏波 生

世の修養の道に進めるものは必ずやこれによりて一番の覺醒を呼び來るや明かなり。苟くも道を求めて止まざるの士は細となく、大となく凡ての機會を執つて以て心靈の修養に資せんとするの覺悟なかるべからず。況や此の如き實例の吾人の眼前に現せらるゝものあるに於てをや、平和の戦が吾人に與ふる警戒は恒久不變なりと雖ども、然も戦の戦が吾人に與ふる警戒は恒久不變なりと雖ども、然も戦の戦が吾人に與ふが如く然く痛切に然く生氣の満々たるものに非ざるを以て、往々にして其機會を逸するや多し。今や海に陸に幾多吾人を警戒すべき實例は作られつゝあり。苟くも道に志あるの士が覺醒一番して以て心靈の修養を計るべき秋は今に於て最も痛切なるを見る。戦の戦は是は佛陀の吾等に下し給へる一大警戒の聲なり。汝の心に於ける戦を自覺すべしとの聲なり。人生は戰場なり、永遠の平和は遂にこの處に求むべからずとの警戒の響なり。吾人の自覺を呼び覺まし給ふ德音なり、無常の彈丸は必ずしも渤海の邊にのみ飛ぶに非ず、汝の足下に爆裂彈は横はれりとの叫びなり。

想起すれば吾邦の青史に戰國の修羅場史あり、當年の猛將勇卒が劍戟の音に生れて矢石の間に人となり、幾度か死生の間を往來して練へ上げたる心膽は恰も鐵の如く、綽々として餘裕を存せしもの多くは皆法体なりき。越の謙信の如き、甲の信玄の如き即ち是なり。彼等は等しく皆參禪の功を積みて心靈の修養を計りたるもの、而しては身幾度か死生の衝を

日曜講話

表裏相應

石川 成章

今日は近角君か歸國中との事て私に是非出席せよとの急な御頼でありました。辭する事も出来兼ねて埋め合せをする事に致しました。偕本日は私か平生感じて居ります表裏相應といふ言葉に題にして御話致す考であります。此言葉は眞宗の正依の經典であります。大無量壽經の中に、言行忠信表裏相應とありますので、私は茲に讀み至る毎に深く感ずるのてあります。表裏相應といふ様な事は極めて解り切つた様ではあります。さて實行となると解り切つた事か中々六ヶ敷いのであります。數學に於きましても公理杯と申せば一部は全部より小なりとか、全部は部分の和に等しいといふ如く是等の事は實に解り切つて馬鹿氣な様な事ではあります。それは中々重大なもので實に幾何學に於ける基礎となるのであります。それと同じ様に宗教上、道德上に於きましても極解り切つた事が非常に大切なのであります。それで私は今日解り切つた題を出して所感を述べて見てもあります。此語の意味は申すまでもなく明了であります。これを私共か父母兄弟親戚朋友に對して本常にやれば實に立派でありまして、常に感情の齟齬もなく一家平和に愉快なる生活か出来るのであります。

す。若し此實行が出来ない時に於きましては始終事に當りて錯誤する事多く禍亂常ならんのであります。下女下男に對しましても此方に陰日向かれば自然向ふの方にも僻みか生じて來るのであります。小兒にしても亦其通りで又朋友に對しても互に胸中を言ひ合はさず、唯表面計りの交際であれば自然疎濶になるのであります。これ所謂口に蜜あり腹に劍有りといふ風情で眞正の朋といふものには無いのであります。甚たしきは敵の如くなるのであります。これを大にしては即ち一國、國に國民の一致が無ければ其國力は減ぜざるを得ないのであります。一本の矢なれば直ぐ折れますが幾本と集めますれば容易に折れない理であります。

今や我國は前古未會有の事變に際しました。五千萬の同胞が精神的の一致が出来ましようならば、地の利は人の和に如かず、尚に強固なのであります。これ此表裏相應の實行の表はるゝ處であります。個人にしても國家にしても無事の時に於きましては、此實行は左程六ヶ敷いではありませぬが、然し一朝齟齬の事件が起り平和が破れた時に於きましては實行は甚だ六ヶ敷くなるのであります。今や已に我國は敵國と干戈を交へて居るのであります。最早平和の時ではないのであります。それで今日は平和の時に於ける實行よりも事變に處しての實行に對する御話をし見やうと思ふのであります。朋友に致しても順境の時に多いか、逆境には少ないのであります。誠に平和の時に於て互に肝膽相照し合て居た朋友も、一度失敗の時に臨むでは何時か離れてしまふのであります。これ等は到底表裏相應の朋とは申されませぬ。私は思ふ

ば萬世の下尙儒夫をして立たしめ、又孔明の出帥表の如きは人をして感激自ら落涙せしむるのであります。何れも皆苦忠苦節を全くせし一大原因に歸するのであります。私か未だ小學時代の幼少の時分に清正片桐等の話を聞いて少からず感じて居りました。先年地震加藤の演劇を見て益感を深くしたのであります。この事は外の雜誌にも出しましたが私が清正に就て感しますのは即ち苦忠を全くした點であります。彼は朝鮮迄も攻め込んで戦功亦赫赫たるものであります。か、一旦讒者の爲に君前を遠けられ遂に閉門の身となりましたが、一日として主君秀吉の身の上を思ふ切々の真心は、俄然震災の起り來るや主君の安否を憂ひ最早身を顧みるに暇なく直ちに馬に飛乗つて登城したのであります。さて登城して見ると城中は大騒動已に主君秀吉公には殿中を立ち除かれて假小屋に憩はるゝといふ有様である。そこで清正主君の安全を聞くや小踊して喜んだといふ。如斯は到底常人の爲し得ざる處であらうと思ひます。

近頃演劇に登て居ります桐一葉に於ける且元もろうであります。彼とても只一身の安全を計らんとすれば他に處すべき道は澤山あつたのであります。然るに讒者の爲に斥けられても社稷の安危を憂ふる念、一日としてやむとなくかつたのであります。然れとも大厦の將に亡びんとする時は一本の能く支ふる處に非ず、遂に豊臣家も亡びたか、其彼か大阪城を立ち去らんとするに臨むても、城頭を觀みて佇立するに忍びず、幽明界を隔て、尙ほ君公を懐ふの心情は如何にも表裏相應の苦忠を全ふした處て有ります。此點に於て私は深く

に朋友に對し國家に對しても此表裏相應の實行に種々の場合がある。私は茲に逆境に於ける實行、即ち眼に見ざる實行、これを國家に對しますれば苦忠、朋友に對しますれば苦信、それから順境に於ける實行、即ち眼に見ゆる實行を樂忠、樂信義とから別けて見たのであります。申すまでもなく此苦忠、苦信義の實行は容易ならぬのであります。然し此兩者を完全に行はなければ眞に表裏相應の實行が出来たとは申されませぬ。古來偉人の中でも後世に敬慕せらるゝ人々は何れの方面に於きまして、前申す處の到底常人には忍ぶべからざる逆境に處し、然も見ざる忠義、見ざる信義の實行者に外ならぬのであります。さてかくの如く抽象的に申すより實例について御話する方が感じか強いのであります。日本に於ても昔から有名なる人は多いのであります。後世の我々が是等の人々を見る時に人間として何ら人物であると見ますのと、人間以上に何ら人物として見ますとの此二種がある様であります。私は獨斷的の考の様ではあります。秀吉の如きは何らいと見ます。が、人間以上の人として見る事は出来ませぬ。又家康の如きも東照大権現とまで稱せられる人ではあります。これも到底人間以上に見て尊く慕ふ事は出来ませぬ。然し楠正成、菅原道眞の如くなる人間以上の敬慕と尊敬を拂ふのであります。共に今日は神と稱られし菅公の如きは天神様と稱して獨り歴史に見る者のみならず、小兒まで人間以上の尊敬を以て向ふのであります。これは何故かと申せば私が前申した處の苦忠苦信義を全くせられたからであります。又支那の文天祥の如きも彼の正氣の歌を讀みますれば

片桐を敬慕するのであります。豊臣家も全盛の時には随分働いた者も多かつたのであります。没落の際に臨んでは働く所か裏切をする様な者も起つて來ました。此間に立ちて苦忠肝膽を砕きし片桐程の者はなかつたのであります。私は先日桐一葉の劇を見て大に感したのであります。清正と云ひ、片桐と云ひ共に苦忠苦節を全くしたる點に於て大に多とするに足る人物であらうと思ひます。是とも未だ特別の敬慕の情は起りませぬ。然し前申しました菅公の如きに至りては、彼の有名なる秋思の詩篇を讀みまする時には眞に斷腸の思あり實に一種異様の感に打たるのであります。又正成に於きましては誠忠無雙であります。畫策は成らず終に戦功を奏し難く最早如何ともする事は是して死に臨むや然かも七度まで生れ代りて忠節を全くせんといつて遂に港川の露と消えました赤心に至りては萬古に芳しいのであります。扱て是等の人々を通觀すれば皆宗教的の信念一貫してをりました事を發見するのであります。正成は禪宗の大徳に歸依して常に公案を授けられたといふ事てあります。菅公の如きは明らかに佛教を深く信じた人てあります。清正も亦日蓮宗の信者であります。片桐に至りては未だ知る處はありませぬか、要するに苦忠苦節を全くし表裏相應の實行の出來た人々は、必ず宗教的の信念を有する人であつたといふ事は誠に深き味かあるのであります。是等の實例によつて見ますれば極端かは知りませぬか、吾人がたとひ如何なる場合に處しても苦忠苦節を全くし得る爲には信念といふものが第一要素であらうと思ふのであります。信念なくして當り前に世を過す人は到底高

向なる理想偉大なる満足を得らるゝものではない、ありませぬ。其極動章とか名譽とか爵位の爲に働く様になりませぬ。遇これを得たる時は奮修安逸を事として、社會の爲には益ある處か寧ろ害を及ぼすのであります。如斯只唯有形のものゝみに目を附け利害の念にのみ馳せて居る人々は多く信念が無いからであります。表裏相應は信念の確立を待て始めて實行せらるゝのであります。私は今の世界を悉く悪いといふのではあります。せぬが、今にして若し國民が此實行を怠る時には將來の國家は實に危くあらうと思ふのであります。何うか吾々は此實行を期し金城鐵壁の國家たらしめたいのであります。豊臣家に只一人の片桐があつた爲に徳川は如何に苦心したのであります。若し彼の時に豊臣家に少なくとも數人の片桐があつたならば彼の様に早く亡びなかつたのであります。只一人の人間が滿腹の忠節を以てする爲に一國家は如何に堅固でありましよう。況や國民舉りて苦忠苦節を致します時には、たとひ有形には他國に譲る處あるも、實力に至りては遙かに強固なのであります。露將マカロフの言ふ處によれば國家の強きは、兵器に非ず、彈藥に非ず、實に兵の一致なりと。其言や實に名言であります。今や此語の眞意は代りて我軍人によりて證明せられたのであります。此度は實に見事なる勝利を得ました。然し我國は決してこれに止まらず益進むて行かなければなりません。そこで最必要なるものは表裏相應といふ事でありませぬ。而して其原動力は信念の確立であります。何ぞなれば宗教の信念は元眞理と吾人の心とか合して始めて確立するのであります。眞理といひ、佛といひ、神といひは眞

も必要なれば此題を出したのであります。一方より言へば信仰上より今日の時局に處するには、或は主戰論か或は非戰論か先づこれを定めねばならぬやうに思はれる。然し今日の如く已に開戦となつた上は最早かかる事を言ふ必要がない。今更左様な事を論ずるのは寧ろ空論である。つまり常識で考へればそれでよいのである。勿論戦争は善いとは誰れも思はない、只人生上の事は一の正しき道によりて行くべき所に行けばよいのである故に何事も總て圓滑に行くとは定まらない。茲に一の信する主張があつて幸ひにその時世に應ずれば甚だ平和なるも、不幸にして容れられざれば獨り武器のみにあらず、苟も正しき主張を信する上はそれを飽まで貫徹せしめんとするには、如何なる手段苦痛をも辭せぬのである。是に於てか戦争の起り來る亦已むを得ない。而して此確信自覺なるものは我偉大なるものゝ爲めにせねばならぬのである。兎に角今日如此時機に當つて先づ己のが立つべき地盤を考へるが最も必要である。かゝる事は平日より誰れも考へては居るが、殊にこういふ戦争の時にあたりて最も著しく感じ來るは即ち地盤の必要である。此地盤の基礎が即ち自信である。自信と言へば種々あるが、最も強き意は自分の主張即ち總ての事が自分一個がやつて居るのではなく、人道とか正義とか大なるものゝ上に立ちてその上より生れ出て居る。恰も絶海の孤島が遙く怒濤の間に屹然として立てるが如く、自分の立つて居る地盤は外界の爲めに少しも動かされぬのが即ち自信である。これは平日に於て充分に養ふ可きものであるが一朝外界の變動の時に著しく現はれ來るものである。猶この自

實の凝りて毫も疑を交ふべきものでありませぬからして、一旦これに融合致しますれば相應せざるはあり得べからざる事でありませぬ。眞の心に不相應といふ事は有り得ないのであります。成程有形上には夫々迫害もありましよう、然し信念より湧き出づる偉大なる力は能く是等の力を撃ち破りて進む事が出来るのであります。若し信念あるものが實行出來ないといふならば、それは偽信者であります。眞正の信者なれば假令火に焼かれ様が、水に溺れ様が、かまわず進み得らるものと信するのであります。故に信念といふものが愈大切になつて参ります。其源清ければ其末清き例で、人生の事總て此信念の清き源より發現せば、其結果も亦實に清き實を收むることが出来るのであります。私は古英雄を見るにつけても明らかに此味を感じ得ましたから、聊感したるまゝを御話致したのであります。(第二求道)

宗教的自信と外戦

近角 常觀

今日は宗教的自信と外戦と云ふ題を出して置きました。今度不幸にして戦争が始まりましたが、然し平生から申して居る信仰問題は決して浮きたる空想にあらず、人生上の實際問題を考へて行くのであるからして、戦争が始まつた已上はこれに對して宗教的自信の上からは如何に處すべきか、戦争の結果は如何なる理想に向ひて進むべきかを深く心に考ふるが最

信と言ふ事を明瞭にせん爲めに他の方面より言へば、人が事を處するに當つて兎角結果の如何を彼は苦慮する事がある、全体結果の爲めに事を爲すは自信ではないのである。結果の爲めに變る様な自信ならば決して不動の地盤とは云へぬ、眞の自信は毫も其來る可き結果を見ないのである。是天地人道萬古變らざる根底となる所である。一個人の言ふ所、國家の行ふ所總て宗教的地盤の上に立てば、即これ佛の意志を代表する言葉、佛の意志を代表する行爲にして、最早結果の如何を言ふに及ばぬ眞の自信はこれである。

諸葛孔明は成敗利鈍の如きは豫めを見ながつた、これ自信ある行である。たとひ天下擧つて非とするも、この事をせざる可からずと言ふ不動の自覺あれば、成敗利鈍は元より眼中にないのである。外界の事變に左右せられざる信仰は、即ち佛の意志に従ひて、自分を没却して佛と共に動くのである。茲に至りて外界の衣服、財産、身体と雖も購ふ事能はざる最後のもの、即ち自覺自信を得て牢乎たる地盤をうち立つのである。人間が世の中に立つとも友人、親戚等に依りて立つ間は一朝向ふが破れるときは乃ち自分も共に破れざるを得ない、故に自分の眞個に立つ可きものは唯自信自覺より外に何もないのである。今その地盤に立てば人はこれ確かなものはない、外界の事情變して如何に迫害が來り襲ふも少しもかまはぬ。茲に眞の宗教家即ち大自覺、大地盤の上に立つ人は、多くの眠れる人の間に唱導する、しかし皆反對せられるけれども飽まで自覺を主張してやまぬのである。たとひその周圍悉く激波となり、又その人の身死し此世をさるも、獨り千古萬

古變らざるものが、傲然としてあるのである。その人の一代事業は十分行かずとも何れの時にか、誰れかによりてその自覺の光は表はされる、否その人の自覺は必ず現實的に光のあるものである。よし肉躰は死んでもその人の自覺は長へに朽ちず、永久に變るものではない。是宗教の根底にして乃ち吾人の生命である。外界の都合のみに心か動かされて居つては進むべき道は更でない。一個人既に如此し一國も亦これと同じ事、一國の立つ所以は國民自覺の根底の上に立たなければならぬのである。これとあれと連絡すればどう云ふ組織になるかなどと、事の進行上につきて種々と心を痛めるのはそれは事を運ひ行く方法に過ぎない。併し立場は抑も何れに立つか、第一自分の座るべき場所にしつかり立ち愈々立つ所に立てばたとひ天地變るとも一度立ちたる立場は、もう決して動かぬと言ふのが即ち萬古に互りて生命のある所である。今一國にて大なる道を主張し、其根底は世界の平和の爲めに其基礎を置き、この偉大なる自覺の上に立つて進むと言ふ事が最も何より必要の根本である。外交、戦争、兵力總てのものが其根底を所謂宗教的自覺の上に立ち立てされれば到底駄目なのである。我國民のなしつゝある事は天地神明佛陀に従へる自覺、即ち宗教的自信の外には萬古を抜くの道はないのである。

今この話を申しますにつき古の日本の歴史を見るに適切な事例がある。近頃久米邦武さんの聖徳太子の外交上の事につきて書いてあるのを見るに、どうも感ずべき事柄計りでありませう。太子は敏達天皇已前より三韓に對する外交を司つ

すべからざる根底たる自覺を外に表はしたのである。

さて猶進みてその自信、その自覺は如何にすれば出来るか我日本現今の位置は如何、宗教的自信を生ずる點は如何なる場合であるか。全國民の自覺は決して漠然として來る者ではない。佛の生命の上のうち立つ自覺は人生界の種々の出來事種々の場合に種々の苦悶をなし、もうこれで仕方がないと云ふ最後の立場に至つて翻然自覺の光を見出すが宗教の信仰である。信仰問題を御研究されるにも、そこに餘裕のある間はそれは駄目である。試に得やうと言ふやうな呑氣な考では到底安心なるものは來ないのである。必ずや皆さんは人生問題にそくばくの御苦心をなされても、この人生の上に安心を見出す事が出來ないから、茲に大安慰を得やうとの御考であると思ふ。自分のなした行ひ、自分の過去の罪惡を願ては唯この心をなやます計りである。茲に吾々は正に佛の慈悲によりて立たなければならぬのである。自分の汚れは佛の光りによりて清められ、自分のこの心がすでに絶對の者と信する上は自分と佛、佛と自分は一体となる。これを禪の方より見ればその唯一の立場たる佛を自分の心に得て、その光と生命は少しも奪はれぬと言ふのであらうと思ふ。幾多苦悶の最終に一つ安慰を得ると言ふは、此自分が人生種々の苦みに出逢ひ一つ一つをそぎとられて行くうちに、最後にもうなんともかとも一髪の餘裕のないその刹那に大安慰の光を得るのである。この光が即ち吾等の生命で、吾等の大根底で、扱く可からざる永久の立場となるのである。故に自信を有する人は何事が起り來るも皆その立場に立つて萬事を處して行く、實業でも、

て居られたが、丁度其常時新羅が自分の強きを以て任那の弱きを切りにいぢめる。是に於て太子は弱國たる任那及び百濟を助け強國の新羅を征服せられたのである。太子の新羅に對する方が常にこの偉大なる精神的自覺を以て向はれたのである。そののみならず、猶進んで當時隆昌を極めて居る支那大國に對して、日出國の天子日没國の天子に書を呈すといふ風風に對外的の行動をとらせられたのである。この對外的は實に太子の立場如何にも堅固であつた、年來日本の外交に寇をなせる新羅の強をくぢき、任那の弱を救はれた事は國家の上に蒙れる大慈悲の教、人類の安寧を外國も自國も同じく蒙らしむると言ふ、大自覺の上に立てられたる不動の根底なれば、その長き争ひも遂に平和に歸したと言ふ事である。殊に當時天下の大國たる支那に對する態度に至つては、如何に自覺自信があつたかと言ふ事が感ぜらるるのである。若し威力とか國力とか又金力とかによりてその自覺に消長が來るならば、都合の如何によりてはすくなくずれてしまふのである。然るにその立ち場さへ堅固なれば總て向ふ所快刀亂麻にやれるのである、已上は太子の事を申したのである。

下つて鎌倉時代にも如何に宗教的自覺、國民的自信が進んで居つたかが見ゆる。御承知の如く北條時宗が元の使を斬つた者である。これは決して日本の形式の立派な事でもなく兵備の完全にも非ず、又富國たるのわけでもない。即ち其當時我國民の位置が既に大自覺が出來て居つたと言ふ事それなのである。故に當時國民の自覺に反したる申込を元の國より受けながら、用捨なくその使を斬つてしまつた、必竟國家の動か

政治でも、教育でも乃至吃茶吃飯に至るまで、その人の全力を傾注して進み行くのである。今國家社會の上にもやはりこれと同じ徑路をとる事と信ずる。

奈良朝時代に聖徳太子のせられた事業のうち、三韓に對する態度により、國運進長し來たが、さてこゝまで國民の自覺を促す迄は實に種々の苦勞をして來たものである。鎌倉時代に前申した通り國運開展したのはその已前に於て既に平安朝に苦み、次て源平時代に至り國中血の雨をふらす慘劇に遇ふたからである。これは佛敎的悲觀でない、同じ同胞兄弟が互に苦みその時代が國民を苦しめたので、平家の一門は西海に沈み、源氏の一族四方に離れ、國中寧日なく、次て鎌倉北條の時代となりしその間の幾多の苦みは誠に吾人人生の苦悶と同じ事である。個人個人皆苦辛慘憺の結果茲に國民の自覺を代表した時宗は元の使を斬り、彼の偉大なる立場不動の自信を表はしたのである。

明治の我國民は今や首を回せば深き深き根底の上に坐して居る事を忘れてはならぬのである。聖徳太子の時に日本が始めて東洋の舞臺に現れて、それがやがて鎌倉時代武家時代を開くべき基であつたのである。然れば明治今日の位置はまさにこの世界に進む時である。子供が生長して自分は自覺せずして進むもその天職を盡すまでには、種々の場合を通じ來て遂に理想的平和の天地に入るのである。明治の子供は多くの時代を受けつぎ今やその舞臺に入りつゝあるのである。明治十年の戦争、同廿七八年の役を過ぎ、今や日本の人民は實に重大なる天職を負ふて將に世界の舞臺に上りつゝある。即ち

此度は今の時であると思ふ。たとひ自分の歩行を自覚せざるもその間種々修養を経過し、唯その行くべき道に行き唯一絶対の佛の光佛の命の下に動く計りである。天下の人心が悉く向ふ所の人道の上に立つのみである。この人道平和の社會は何物も汚す事の出来ないものである。各人の正義はやがて國家の正義と表はれ、一人の悪は即ち國民全體の不正となる、一即一切一切即一の道理である。然れば一人眞面目なれば天地も爲めに感ずる、全力の向けらるゝそこに活ける生命がある。仕事をして居る人がその仕事をするのに奮に剣をもつて自覚するのみでない、その自覚の立場に立つてやる仕事は即ち戦に出づると毫も異らぬのである。四千餘萬の同胞今や一意正義の人となり進み行かば、之を遂に世界全體の上に及ぼす事が出来る。

然れば現今の時局は誠に國民の一大自覚の時に達したものである。國民一人一人皆此心を以てこの宗教的大自覚の上に立ち、肅々として身を慎み進み行かば遂に行きつく事が出来るのである。御互に此時機を以て自覚の地盤に立ち進み度いものと思ひます。

我國二千年來の精華人道を發揮し、佛の世界を東洋より始めて世界全體の上に必ず及ぶ時が来る事を信じて居る。即ちミクロコスモスはマクロコスモス一切の上に立ち、一人の爲す正しき事は國家全体天地も必ず之を感ずるのでありますから、正しきものは通すと言ふ大なる自信力の上に立つて行きたいと思ひます。

社會事業

池山 榮吉

●機械的工業の勃興に伴ふ最近國民經濟の發展は、社會構成の上に着しき變革を來し、資本家對労働者の關係が生じてより、貧富の懸隔が見る／＼劇甚となり、茲に所謂社會問題と云ふものか起つて來て、之が解決に汲々たるは方今文明各國の常態である。他に比類なき急劇の進歩を爲せる我國の如きは、殊に此點に就て深く警戒しなければならぬ事は、理の最も明瞭き所である。近時往々にして共産的社會主義を鼓吹するものあるに至りたるは我が國に於ても、亦業既に問題の愈々切迫を告げて來た證據と見るべく、或る意味に於ては自然の趨勢と謂ふべきである。が、その共産的社會主義者の主張する處は、多くは空想に走るの結果徒らに煽動的破壊的となりて了つて、社會の基礎を危くするものと云ふ事は、識者の夙に看破する所である。

●翻て今日我國に於ける實際社會缺陷の救護を目的とする設備如何を見るに、一般慈善事業の如きは、洵に微々たるものであるのみならず、もと這種の事業の目的とする處は、労働能力又は自立能力のないものを救護するにあるので、未だ之を以て所謂社會問題、労働問題と直接の關係あるものとは云ひ難い。而して、労働能力、自立能力を有する下層の人民、即ち所謂四級團を相手として、其の利便を救護し、奨進するを目的とする事業、此の意義に於て稱する社會事業に至りては、殆んど見るべきものなく、社會の前途を思へば轉寒心に堪へざるものがある。

●さて、労働能力、自立能力あるもの、利便を計る事業、即ち所謂社會事業と稱するもの、中にて、大体自動的のものとは助的のものとの別があつて、自動的の事業とは、例へば、労働組合、消費組合、相互保險の如き労働者同志打ち寄つて、共同の利便を計る事業を云ひ、他助的の事業とは、國家、地方團體、僱主、又は第三者(社團、財團、又は篤志者)の經營に係る事業である。我輩は豫て社會事業の必要を感じて居た事は久しいものであるが、先年歐米に於ける這種事業を視察して以來、益々其の感を深くした次第である。此度こそは意を決して自ら其の衝に當り、實行的社會政策の立場に據つて、建設的に着々効果を實際に收めん事を期して、先づ、主として他助的の事業の方面に向つて及ぶ限り働いて見たいと思ふ。が、その仕事たるや極めて重難で、到底自分の力ばかりで行く事ではないから、茲に謹んで大方の贊助を仰いで置く。

附言、他助的の事業の種類に就ては、本誌の前身たる政教時報にて屢く論じたが如く、労働紹介、失業者労働場、職工寄宿所、下婢宿泊所、改良安泊、實業夜學校、貧民貸家等であるが、労働者の利便を計る事業は猶ほ他にも多々あり且つ將來時勢の必要に伴ひ種々新事業の案出せらるべきは勿論の事であるから、善く其の難易緩急を考へ便宜施設する積りである。

●新刊紹介

安藤州 一著

◎清澤先生信仰座談
人生誰れか快楽の情なからむや、而して生死問題、衣食問題の如き最も人生の苦悶とする所也。本書は一小冊なりと雖、以上の諸問題に向て劃切なる判断を與へ、胸裡の雲霧を排して頓に清風明月に對する思あらしむ。而して談する人は教界の明星として夙に萬人の敬仰しておさりし清澤先生其人也。先生逝いて將に一年ならずむす。されど先生の福音はそれ永久に滅せざる也。一たび此書を讀めば先生の偉業昭乎として尙在す。如し。讀み去て感最も深し。(定價拾五錢)木郷浩々洞)

舟橋水 哉著

◎小乗佛敎史論
著者は眞宗大學研究院にありて小乗佛敎を専攻しつゝあり。而して本書は其研究の一半を公にしたるもの也。本書の内容は印度、支那、日本の小乗に分つて共に印度の部に於て更に分つて三期となし、計五期に區別して密かに本書の大部を構成せり。最も有益なるは世觀を中心として詳論したる篇これ也。從來意を留めざりし小乗佛敎を研究して其面目を發揮せんとしたる、著者の勇氣と努力には多大の感謝を拂はざるべからず。(定價五十錢)木郷文明堂)

德永規 炬著

◎逆境の恩寵
人生の悲むべきもの何ぞ限らむ、而も有爲の志を抱いて、病宛に襲はるるか如きは悲むべきの最も大なるものの一也。況や不治の肺患を得て空しく床上に呻吟するに於てをや。余輩著者を知らず又信仰を異にすと雖、逆境の恩寵を縋いて寤に同情の感に打たれざるを得ず。若し夫れ著者を知るに於ては其感果して如何の吾等の信する佛敎にも病患を得て之を喜ぶまじき云へり。著者は全く病にありたるもの悪みを受け逆境に處して恩寵を被りたるもの也。これ宗教の堂奥に入りたるものにあらずむば、焉が如斯平和なる眷の間に遊ぶを得んや。而して著者の語る所一點の飾りなく、言々切々肺腑より出づるの感あり。これ著者の言なりと雖、實は神の福音なりといふべきか。若し世の人類間の雲に鎖され、救済の光明に接するを得ざらむか、去りて本書を讀む。たとへ信仰を異にすとも、其得る所甚大なるものあらむ。況して信仰を同じし神の擢理に依らむとするものに於ては、直に取て心氣上の資糧となすべし。(定價四十錢)京橋香齋社)

巖谷小波編

◎明星夕星
世界お伽噺の第五十五編として出でたるもの、朝星、夕星は二人の兄弟の王子の名にして、朝星は其名の美くしきにも拘らず、已が餘み根性より計略を以て夕星を殺したるが、後之を悔めて自身も死したる筋書也。而して其終りの句が面白し。その時から二つの星が、新に空に現はれましたが、一つは朝早く、一つは夕方ばかり見えて、決して二つわ列びませんでした。(定價八錢)東京傳文館)

同一鹹味

信仰の力

百目木 劍 虹

人は心に一點の堅持する所あれば、何事も恐るゝに足るものではない、寧ろ誘惑の水が込み込む隙がないのである。よし風雨如何に吹きすさぶとも、白刃頭上に閃くとも泰然として少しも騒くに及ばぬ。彼の戦々として薄氷を踏む思をなすものあらば、そは未だ心の安住を得ざるものである。彼の水に溺ること憂ふるものは、これ心に自得せざる所あればである。泰山は動かさず、これ牢平として根底堅ければである。砂上に打ち建られたる家屋の倒れ易くして、巖上に築かれたる樓閣の極めて安全なるは、凡ての人が承認して居るにも拘らず。倒れ易き砂上の家屋を學ばむとするもの多きは洵に不思議の現象と云はねばならぬ。若し人にして一點堅持する所あらばかゝる愚を學ぶ筈がない。

たとへ社會萬人を擧げて非難の聲を發すると、顧みて内に疚しき所なかつたらば、所信を行ふに於て何の障る所がない。固より我等は弱き者である、警戒は怠るべきではない。垣根は常に破れ勝ちである、稍もすれば心中の賊は垣根を越へて吾等を脅かしつゝある。されば吾等は闇みの月日のみ多くして、光りの伴ふとは尠ないものである。百歩進む中に光り

豫期せざる事の意外に成ることあり、畢竟人生の事のみは、數學的法則を以て打算すべきものではない。我々は殊に幻想に富む、全く無益の影を追ふて苦むのである。生活問題も要は之に過ぎざるのである。蒼空を翔ける鳥は何の貯へもない、曠野を走る獸と雖も固より貯へのあらふ筈がない。されど天の恵みは彼等を棄てざるのである。況して信仰の力を得た人ならば、佛の恵みは蒼天の我等を掩ふが如く決して洩すことはない。

我等は信仰の力を得たとて油断すべきでない。益々向上の一路に勇ましく進まねばならぬ。善を行ふよりは兎角惡に近き易き我等である。先づ惡を避くるには佛の力を念ずるがよい。さらば惡事の芽は摘まるゝのである。若し人怒の心發するときは佛の力を稱ふるかよい。唱へて一分、二分、三分、斯して燃え立つ炎は消えるのである。我等は佛を忘るゝことによりて多くの不幸を招くのである。善にまれ、惡にまれ、何事に就ても佛の力を感ずることが必要である。叩けよ門は開かるべしとは無始永劫の約束である。信仰の力を感受する正に此にあり。叩かば忽ちにして佛の攝護に包まれるのである。佛を忘るゝ人は此約束を忘れた人である。約束は守らねばならぬ。永久不滅の寶は法藏に充ち満ちてある。早く門を叩きなさい。

鮑魚の市に入るものは久うして其臭を感ぜざるが如く、初めに中こそ、あゝ罪惡なり、暗黒なりと感じて、後には罪惡をかさね、暗黒に迷ふことの長き墜道の連續によりて、罪惡をも罪惡と思はず、暗黒をも暗黒と感ぜず、漸々闇みの空に迷ひ、刻々罪の穴に進むのである。これ皆心に守る所がないからである。荷も塵乎して一片動かすべからざる心だにあらば、貧の敵も、慾の魔も、怒の鬼も襲來の隙を問がない。況して外界の誘惑の如きこの金城鐵壁の心を破ることは出來ないのである。抑々動すべからざる心とは云ふまでもなく信仰の力を指すのである。若しも信仰の力に依らずして建てられたる家屋は一難に遇ふ毎に掛け、一災の到る毎に仆るゝのである。机の倒れざるは中心によりて保たれつゝあるのである。信仰はげに我等の中心である。

若し我等にして信仰を離れたらむには、空々として無人の曠野を行くが如く、吾々は全く意味なき不安の生涯を送らねばならぬ。嘗に不安の生涯を空過するばかりでなく、墮落の淵に歩々近よるのである。我をして怒の心を抑さへしむるのも信仰の力である。我をして貧の敵に勝たしむるのも信仰の力である。我をして種々の誘惑を防がしむるのも儘に信仰の力である。

世の人多くは生活問題に苦まざるものはない。勿論人生に取りては一個重大の問題である、が、人生の事多くは豫期すべからざるものである。豫期したる事の却て期し難くして、

無題錄

鈴木 卓 苗

「知ることは信することにあらず」と云へる語ほど吾等を迷はしめたるはなかるべし、

知ること已に信することにあらずば吾等の修學研智終に何するものぞ、と之を先輩の知者に正すに、等しく、道理方に然るべきを説いて、學を捨て知を忘れ只管に先賢の知言を信受すべきのみといふ、何ぞ知らむ實に由々しき誤解ならむとは吾猜するに「知る」なる機能は「信する」なるそれと異なる、しかれども知解を離れて吾等は果して何を信じ得るとするぞ、更に思へ、信することをやめて我等の知解は何處に安定の地を見出し得るか、知解が心内に於て安定の地位を取りたることを「信する」と言ひ得んか、しかり、唯知解することは、これ信することにあらずして、むしろ信するの素を供するに過ぎざることを了せむ、

信念は畢竟的に變動するものにあらず、故にかの新を追ひ珍を求めて變動するものこれ知識のみ信念にあらず」としかり、信念は變動するものにあらず、しかもそれは只信念なるもの、固定的性狀を言明せるとする、たとへば「論言汗の如し」と言へるは、論言一度出ては又之を撤回すべか

らざるを意味するも、その月を越ゆる年を更ふると共に、新法を以て之に代へ、新令を以て之を動かすに於て、敢て妨げざるが如きか、

人のある知解に基ける信念を獲得するや、之を超へたる新知解のなほ來らざる間は、その信念は絶対的なり、不變的なり、更に超越せる知解の來りて、四邊を震撼するあるや、舊信念は山羊の屠場にのぼるが如く、悄然として權威の甲を脱ぎ、新來の知解の爲めに信念の座をゆづるに躊躇せざるなり、知るべし、

信念は不動なり、しかもその内容に至りては刻々に變移す、これむしる怪むを要せんや、

信仰をすゝむる者はあり、之を説くものなし、

小學校に通ひける頃、われは古賢の跡を追ふて只管に書を讀めりき、「讀むこと」の外には讀書の意義なかりしなり、しかるに今はしからず、如何なる書は最もよく知識を補ひ、徳を高むるやを思ふて、撰擇して之を讀む、

吾想ふに幼時を以て賢なりとすべからず、又今時を以て不信心なりとすべけむや、

今の世信仰を求むるの聲喧しくて、之を獲て喜ぶもの少きは何ぞや、教導の地にたてる者多くは信仰をすゝむるに忠なりと雖も、之を説くことの疏なるに坐せずとせんや、

彼等は、むかし 小松内府の誠忠誠孝の鑑をもて、今日に當てんとし、小楠公の美姬を辭せしことを以て唯一の名節となすの流にあらずや、時はうつり世は變るに形式事情の變推を

於てか煩惱し、惑亂し、早く春風和光の境を得て、身心の安きを味はんとす、この境容易く至らず、徒に懊惱を増すのみ、

帶をとりて体をあげむとするに、力をこめて上に引かむとすればするほど、体重を足下に増すが如きか、

肴を盗む猫兒の狡なるをあらはれまんに、彼をして競々の怖をなさしむるなかれ、盗むは彼の性なればなり、

名譽をのぞみ、切名にあくがる、者を嚇すに、その一切を棄てずんば信仰の護られ難きを以てすることなかれ、須く彼をしてその名譽その功名畢竟人生の焦身焦慮を價するものなるや否やを究めしむれば足る、嬰兒の玩具に親むも、半日その愛好を續げずして遂に又他に向つて求むるを見る、人生悠々、吾等は名譽の追求に倦み、功名の美酒に飽きたるとき、不朽の追求、甘露の法雨を求めざらむとするも、得ざらむ、この時初めて信仰の門に入るべし、

古來の諸聖皆かくの如くにして道を得法をさとり、籠を後昆に垂れ玉へるにあらずや、

近き過去に、吾等は「教育家の收賄」を以て驚かされたりき、如何となれば彼等は皆講堂に立ちて、人倫五常の大道を説けるの教育者なりければなり、

今の世に、晝は教會に法を説き、夜は待合に密語するの僧者あるを怪まず、これ何の兆ぞや、

彼等教育者は、節義廉耻の徳義をよく説けりと雖も、衷心には黄金の威、美酒の味なほ遙かにその徳義にまされるを信じ

豫想せずんばあ、道は終に嚙語に屬せむ、

信仰は生命なり、火なり、光なり。之を一定の形式下に律せんとするも得べからず、

已に生命なり、乳に餓えてなく嬰兒の叫はこれ信仰の叫びにあらずや、

已に火なり、相思戀々、片身に思を焦すもの、これ信仰の渴仰にあらずらむや、

已に光なり、愛兒の運命を暗より遠け、幸福の光明裡に置かんとして、心を勞する慈母の寵、これまた信仰の光にあらずらむや、

己れの帶をとりて体をあげむとするものあらむに世はその愚なるを笑はむ、

今の信仰を求むるものかれに類せずや、

功名のこゝろ青雲に駕せんとし、虚榮の念銜氣を敷し、嚙勃たる霸氣を抱いて、人生の大渦に投ずるや、思ふこと心に添はず、求むる所多くは得るなく、人憐り己れすくみ、遂に衷心の不平遣るに所なく、走せて救護を佛陀のもとに求めんとするもの、滔々としてしからざるはなし、何ぞそれ慘なるや、

道を説くもの、彼等に誨ゆる所を聞け、

爾の所有とするものは皆罪惡の手引なり、そをあげて棄てずんば救護の御手に觸るべからず」と

學人志を立て、より、古賢先覺の芳跡を慕ふて、十年一日の如く勵みなしたる、和解理辨の財産をば、蔽履の如くすてよと強えらるゝは、これ決して耐ゆる所にあらずらむ、こゝに

たりしなり、悲哉彼等も亦、吾等の如く、「教へられたる徳義」を暗んじたりしなり、收賄はむしる珍とすべからざらむ、

彼等僧者は、人生無常にして色法共に樂むべからざるを説くも、眼眉柳腰の美と、微醉の心地よさを以てすれば、こゝに不朽の里、不滅の樂あることを信するが故に、夜隱に乗じて微行を禁じ得ざるなり、

道を求むる者よ、信仰にあくがるものよ、

吾等の求むるもの、何なるかを問へ、而して吾等の半生を捧げて焦身焦慮之を得んとてあくがる、そのものは果して如何なる珍寶なるかを思ひきはめよ、

釋尊臨終にのたまへる「汝等まさに自ら頭を摩つべし、飾好を捨て、壞色の衣を着し、應器を執持して乞を以て自活す……」は求道の者をして反省せしむるに足らむ、

千里の道は一步にはじまり、一年の大計は元旦にありとか、吾等は今こゝに「不朽の珍藏」を望むは、これ千里の一步に於けるなり、道心堅固に旅装調ひなば、吾等は更に一生の大計につくの思を以て、金剛地に立つべし、あゝ何の境地か達せられざらむ、何の誘惑かこれ恐るべんむ、

法は良藥なるべく、師は良醫なるべく、而して己れは一箇の病者なることを念とすべきは、求道者の用意方にしかるべき處ながら以て宗教の意義こゝに終るとなすは如何ならむ、

肺をやめる者、醫に走せて藥を服す、病は救はれむ、救はれたりと雖も、而も安んずべからず、日夜、惡鬼惡魔のうちかゝつて吾等の四周にあるは、これ人生無常のさまなり、かゝる世

に立ちて、身心の安康を保持せんとするもの、まことに戦々競々たらざらむとするも得ざるなり、病魔を避くるが爲めに、衛生養生の道を要すべくば、宗教は實に「人生養生」の大道を示せるものなるべし、こゝに於て宗教は人生問題と接觸す、これと、殆んど同時に、宗教は又人生の指導たるべき使命を賦與せらる、何ぞや、手を以て手をつくらない、足を以て足をつくさなよとのモゼの世法を超えて、宗教は仇を亡ぼすに恩愛を以てすべきことを教へたり、

今の世に於てすら、なほ武器と軍隊を以て國家を守護し、功名と美酒とを以て人生の短かき春を色彩るべきものと思ひなせるに係らず、宗教は「正しき道理」を求めて人生の嚴謹法城となし、瞻仰と感謝とを以て永久の生命に入るの道となしそこに開かれたる淨土を以て、かの虹霓の敢果なきを嘲けるなり、

愛は絶対命令者なり、

法華經壽量品の偈文に

衆は我が滅度を見て、

廣く舍利を供養し、

而も渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し、

質直にして意ろ柔軟に、

一心に佛に見ゆたてまつらむとして、自ら身命を惜まず、

大靈の光

仁科 幽溪

春來れば春樂しく、花も霞も我が爲めかと喜ぶ。夏來れば夏樂しく、松虫も螢も我が友と喜ぶ。秋來れば秋樂しく、月の光も葦の葉も我を迎ふかと思ふ。冬來れば冬樂しく、嵐もしぐれも我を見舞ふかと思ふ。若し春の山を踏みて尋ぬる花もなく、若し夏の川を訪ふて遊ばむに螢あらず。若し秋の空を望みて仰ぐべき月は雲に入り、若し冬の小庇に木枯渡ることもなく、天象、我に反し、地景、我に背く時、嗚呼嗚呼、

此天地を併呑せむと努むるも、何ぞ知らむ、佛の大威力は不可思議にも我が胸中に神出しつゝあり、此時、八萬四千の煩惱の賊、毫塵も心靈を犯す能はず、忽ちにしてその影を没す、茲に於て乎、最後の勝利は佛の信光に皈して、靈城ますく、永劫に嚴立するに至る也。

感謝す、大靈の佛陀如來よ、如來は大精進力を施して、さゝやかの我が心靈界を擁護せり、これまさに佛他力の光大なればなり。若し我全力以て妄念を亡さむとし、或は天象の變轉たる光景、地軸の遷移する風潮に反抗せむとし、或は外來の魔力、百鬼の襲來に防備せむとし、自の力量これに當り、自の精心之に渡る。その妄念の賊に遇ふ毎に一敗し、魔力に接する毎に一亡せざる能はず。然るに今、佛陀大悲の他力に乘托せんか、小軀恰かも大鐵鑑にあるか如く、清風明月の靈光、暗を破り、妄を滅するの効、歴然として我を救濟す、まさに何の辭を以て謝せむとすらん。嗚呼たゞ一言の謝辭あり

曰く「南無阿彌陀佛」の唱名これ也。
感謝す、佛陀如來の靈よ、且暮の清夜により、晝夜の明窓により、山谷を通じ、都鄙を渡して、春の日に春の靈光を現じ、夏の日に夏の清韻を漏らし、秋の日に秋の風景を示し、冬の日冬に冬の靈音を降す、我多幸にして時處に感せられず、所縁に縛せられず、まさに何の辭を以て謝せむとすらん。嗚呼唯一言の謝辭あり、曰く「南無阿彌陀佛」の唱名これ也。大靈、光あり、願くは、わが海陸の軍に旅せる君の上に照護あれ。

奈何か春を樂むべき、奈何か夏を愛すべき。奈何か秋を迎ふべき、奈何か冬を味ふべきぞ。此時、我は悲むべきか、然り、我若し天象と地景と而已に心を措き、他に偉大の靈感なくば、まさに悲泣號哭して絶息蟄命すべけむか。そも……あ、佛陀の大靈あればこそ、光明あればこそ、大悲あればこそ、我は依然天象を怨みず、地景を咒はず、星明かに、月清く、花美はしく、山緑りに、而かも心中に此大靈の光存し、而かも心中に此絶美の四季を有す。多幸なるかな、大靈の光うけしるもわがいまの身、豈に佛陀大悲の餘德ならずと謂はんや。

さらば天地は佛陀が靈光の顯彰なり、天地の中間に、人の世界あり。そもまた人の胸中には日月と等しき光満ち、松柏と同じき節操あり。叩けば響くべき清韻通じ、呼べば應ずべき風致存す、以て親むべく、掬すべく、愛すべく、言、花と薫じ、語、玉と現するものこれ何等の清興や、何等の靈光ぞや、若し此天地、此世界、この如き日月の光あるなく、この如き松柏の節操あるなく、叩くも響くべき清韻あるなく、呼ぶも應ずべき風致存するなく、惡鬼は玉兔を屠りて空中を荒涼し、蠻賊樓臺を汚染して毒炎を放つあり。以て親厚あるなく、道念あるなく、言、惡蛇と現じ、語、毒龍と變するあらば、これを奈何かせむ。我もまた此渦中に做ふべきか、投すべきか、以て宇宙を咒ひ乾坤を怨み、黒風猛火の中に盲動すべきか、かくて佛陀の靈德を疑ひ、その大慈悲を傷くべきか、そも斯の如き時、靜思默念する所、豈に料らん、心、微妙にして佛陀の靈に通ずるあり、一念不動の信光は、却つて爛々として我が胸中に熾んなるを。嗚呼、惡蛇毒龍は奈何

南村閑話

一 記 者

◎近作か、別段御目にかける程のものはないよ。これでも若い時には二千や三千は作つたものであるが、近頃は思ひ出るまゝ口吟しても書き留めておかぬから頓と忘れて居るよ。詩も書も下手であるが、話をする位は心得てあるよ、臥病中の作を御目にかけてまじやう。

家既清貧血亦貧。 書窓弄筆手將龜。
誰言病臥詩興乏。 梅送暗香鶯報春。

◎今年はもう七十八歳だが、七十と云ふ聲のかゝる間は八十にまた遠いやうに覺ゆるが、八十に二つ少ないと思ふと何となく物悲しく感ぜらるゝ心地がする。

◎猿に一時に七個の食ひ物を與へたが一向喜ばなかつた、そこで朝に三つ暮に四つを與へて始めて嬉し顔したと云ふ話があるが、吾々も利巧相な顔付しても存外愚なものである。世に謂ふ朝三暮四とは此邊からの出處であらふ。

◎近頃勤儉貯蓄の聲が高いやうである。安積良齋の文略に勤儉を施すには天災地變の時に限ると論じてあるが、平素無事の時は勤儉は逆も行はるものではない。むかし徳川の天保十二年に水野越前守が勤儉の改革をやつたが、之れは随分きびしい事で、婦人の如きは髪を結ぶことまで禁ぜられた位であつた。最も此時は上下一般に奢侈の高潮に達した時であつた。或人の句に『笑ふもの笑はれて見よ花の旅』と云ふ句があ

まゝ冷水を浴せながら、馬鹿め、お經を讀むて何になる、早く駆けつけて消防に盡力すべきぢや。と罵りたと云ふ話があるが、篠原の念佛主義もよいが、三百萬圓の火災は現に自身の本堂に燃えつゝあるに拘らず、念佛ぢや〜と云ふたと、消災咒を讀むと同様何の益にも立つまい。近頃の滑稽である。

◎田地に悪田なし、寺に貧地なしと云ふが、全く法を弘むる人によるのぢや。法を賣るやうではだめぢや。

◎禪家には食前の五感といふものがあり、食事をなすときにあたり、先づ心を静めて其恩を感謝することである。兎角人間は増長して不味いと云ふ、喰へぬとか云ふて、我儘の心起すから良薬の如く思へと云ふことである。明恵上人が味噌汁の中へ障子の棧より態と塵を入れて喰ふた時、待者怪みて問ふたら、今朝の汁は殊に美味であるゆゑ、奢に慣れぬ爲め入れたのであると答へたさうである。平生の覺悟まさに此通りであるべしぢや。

◎動物虐待防止會に出席せよと云はれて、會費はと問ふたら正に壹圓と云はれて斷りた。こんな高い會費では家内虐待ぢやからね。

◎聖徳太子以後慶長まで破佛家はなかつたが、獨り宋學が盛になつてから、之を聖徳と云ふも一凡庸の王子のみ」と云ふやうなひどい事まで云ふやうになつた。

るが、當時の士分などが此の改革に反抗した意味もあるやうだ。又『ねながらこれも奢か鹿の聲』と云ふ句もあるが、如何に奢侈を事としたのか、歴然として目に見ゆるやうだ。

◎彼の中島棕蔭の狂詩にも、『足燃縮緬紅鹿子。頭光金銀珊瑚釵』と云ふ妙句があるが、形容し得て妙である。

◎此間人民の貯蓄を奨励せん爲め、五圓の勸業債券募集の事を議會に提出しようだが、議會は人民の僥倖心を防ぐ爲めと云ふ否決したと云ふ事である。趣意は結構であるが、今日僥倖心のないものが一人もあらふ筈がない、寧ろ之を利用して貯蓄の方法を講ずるのが急務である。五圓でも十圓でも手にある中は知らず〜空費してしまふによりて、債券の一枚でも買ふておくのが勤儉の本趣に叶ふのだ。

◎『ぢやにより常が大事ぢや年の暮』と云ふ狂句があるが、獨り勤儉の事斗りてなく、安心問題も常が大事ぢや。眞宗では平生業成と云ふが最も次第ぢや。金儲も、名譽も少しもあてにならぬが、死ぬ事ばかりはちやんと請合じや。こんな明白な事はあるまい、然るに世の人は多く之を知らぬ、盲の世の中ぢや。

◎オ、近角さんのお父さん逝くなられたさうだか、年は幾つ、六十六、そう。『昨日まで人が死んだと思ひしに今日は我身でこれはたまらむ』と云ふ句があるが、わしはもう七十八だ、これはたまらむ、たまらむ。

◎東本願寺はどうなりましたか、むかし鎌倉の圓覺寺に晦殿和尚ありて、或時近隣に火災が起りた、寺の小僧共が俄に本堂にいたりて高らかに消災咒を讀むた。所が、今の和尚桶の

毎月教壇

予が宗教的實驗

近角 常觀

「佛教之眞髓」の續稿を書くべき筈なれど、此度父が入寂した爲め、他の事は頓と書く氣にならぬ。故に一層自分の宗教的實驗を告白し、亡父に負ふ所多かつたことを書きて見ようと試みる次第である。是追善の一端にもなり、又實驗の見地より宗教を見るの一例ともなることなれば、毎月の講演と強ち無關係にもならぬ。されど全く自己の告白寧ろ懺悔と云ふても然るべきものなれば、個人的の事實が多し、故に是は講義とは別として聴いて頂きたい。

ツイ近頃の事の様に記憶して居るが、誰であつたか私に向て、君の信仰は誰より繼承したかと尋ねられたことがあつた。ソ、尋ねられて見るとスグに答が出来ぬ。有昧に白状すれば澤山先輩より教を受けて大なる感化を蒙りて居る恩師も多けれど、自分の信仰の中心たる部分は誰より授かつたと云ふことは言ひ難い。強て言へば佛より授かつた、そして、其信仰の定まつたのは苦悶した時じやと答へた、ツイ先達ての事であつたが。此度イヨ〜父と別る〜と云ふ時になつて初めて、自分の信仰は全く父より繼承して居たことに氣が附いた、苦悶時代を初めとして色々の宗教的經驗をしたが、かく

の如き困難の時に蔭に居て非常なる念力を以て之を守りて呉れた人は親であつたことに気が付いた。猶一步深く考へるに此の如き経験をなすべき性質夫自身が親よりの遺傳であつた之を養ふて下さつたのも又親たることに気が付いた。日出ては耕し、日入て憩ふ、井を堀りて飲み、自ら耕して食ふ、帝力何を我にあらむやといつか自分てやつたつもりで帝王の存在に気が附かぬのは、帝堯の徳化があまり大なるからである、我信仰の如き實に其趣がある。自分が實驗したと考へて居るが、首を回らせは其實験が皆親の賜物で出来て居るのであつた。思へば實に廣大なことである。

私は至小の供の時より物事を思ひ附くと云ひ張つてきかぬと云ふ性があつた爲め、親にドレ程心配を掛けられたか分からぬ。タシカ七八歳の時京都の病院へ連れられて往きた時、診察が終りて、他の同行者が其日に大津に歸ると云ふたら、私も歸りたいと言つてきかぬ。泣き出してきかぬ。夫が爲め父か日暮より大なる小供を負ふて、滋谷越を暗夜に三里手さぐりをして越へられた。其同行者皆婦人である上に、其時分には随分強盗追廻などか出ると云ふ噂があつて、頗る氣味が悪るかつたと一代話された。暗き小路から山科街道の明るい所へ出た時は、小供心に猶覺えがある位なれば物凄かつたに違ひない。昨年の秋頃此道を通りて、言ふに言はれぬ感慨を起した。かくトードもよい事には親がドレ程苦勞してでも言ふことを聽いて下さつた、夫が爲めに物事に挫折せず、意志を固くする様に養はれた。かく私は物事に固執するにも拘はらず、頗る内辨慶で、人の中でも人の言ふことに従ふ風であつた、

であつた。夫故父は偽の懺悔を爲たり、道徳家ぶつたり、殊勝らしくするのが大嫌であつて、節なき、正直を好まれた。實意なき浮薄な人などは話をしたり、同席するのも嫌はれた。現に父が臨終の時も其喜び様は平生と毫も變はらなんだ、ボケ氣味があつたからにもよらうが身体の苦と心の安心とは別になつて居つた。平素よりは特に念佛を多く唱へると云ふ様なことはなかつた、實に變らぬ、正直な、眞面目な確な、點は自分の親乍ら實に稀な人であつた。悪ことを善く膳ろうといふ様なことは毫もなかつた、悪かつたことは悪い、仕方のないことは仕方かないと云ふ性質であつた。常觀などもドットせぬ」と云はれたのは此點より眺められて、猶程遠いのを直言されたのであらうと私かに愧づる次第である。勿論深き學者でもなければ、高き徳者と云ふてもなければ、此性質を見聞して居た爲めに私は親鸞聖人の人格、信仰、宗風などを幾分か理解することが出来る様になつた様に感じて居る。かく色々の點より感化を蒙りたけれど、直接に自己の信仰實驗の告白に進むことにしよう。

屢言ふ通り私か信仰らしきものを得たのは、明治三十年の苦悶時代である。其時の事實、心の有様、などは信仰の餘瀝の「宗教的同朋」を初として屢々言ふたから止めにして、其時父が如何に心配して呉れられたか、其時の病氣が癒つたのは、慥かに大もとは佛の慈悲に違ひないが、此世では親の念力で助かつたに違ひない。夏休暇中故郷に居て日夜昏々として齋ぎこんで居たとき、父がどふかして之をなほしてやりたいと思ひて大層心配して呉れられた。モ一年で大學卒業と云ふ

實は従ふのではない、心中頗る不満なれど、猶適切に言へは他が悪ひと思へど之に抗議することの出来ぬ風であつた。一時は負けるは勝つのはやと考へ、盲従を以て謙讓の如くこじつけて道徳を行つたかの如く自ら慰めて居つた。然るに或時母か新たに織りて下さつた衣服を着て遊んで居つたが、勿論過てはあつたが、他の小供にサン／＼に泥を澤山附けられて歸つて來たら、イツモやさしい父親か決して承知されぬ。他人に泥をぬられてオメ／＼歸りてくる骨板があるものか、是非とも泥を付けた奴に洗はして來ぬと叱りて決して家に入れて呉れられぬ。其時ホド／＼自分の意氣地なしにあきれて父親の大打撃によりて體面を保つこと、謙讓とは大に區別すべきことを悟つた。寧ろ正しき事の爲めには、如何に苦しくても之を主張せねばならぬと云ふ考が養はれた。本来私は臆病であつたのであるから、他に泥を付けられても、之を洗つて返せへと抗言するよりは、泣く／＼でも自分の不利益に甘んじて居る方が、ドレ程自分の氣に叶つたかしのれぬ。サレド此活ける教訓によりて従來性質になかつた物が出来た様に今に感じて居る次第である。

我を育つる爲めに又我に學問させる爲めに、非常に苦勞されたことは影しけれど夫は畧して信仰のことだけにしやう。信仰と云へば、前にも有様に書きて置きた通り、父は頻りに法を喜はれ、随分遠方まで求めに行かれたことを記憶する。殊に門徒を感化し、夜會を催ふし、談話會を設け、懺悔を聞くなどの事皆行はれた。勿論是は吾親ばかりではない、佛敎の盛なる地方にはあることなれど、父の遣り方は頗る眞面目に際まで漕ぎつけて、この有様は何たることである、命長ければ恥多しと云ふことがあるが、自分もエライ死に耻をかきたことである。しつかりやれと戒めてもみたり、自分は餘命もなき身體なれば、代れるものならば代りてやりたいと念じて呉れられた。其苦悶の最後カ、チエと云ふ病氣になつて長濱病院に入ることになつた。其苦悶の有様は信卷に御引用ある涅槃經の阿闍世王の苦悶其儘であつた。其時の両親の心配は一通りではなかつた、切開を行はねばならぬと云ふ時に、衆人がセメテ大阪か名古屋で手術を行ふ方がよからうと云ふたが、父は一點の躊躇なく、斷然直ちに此病院で行つて下さい、幸にして本復さるか是で終になるかは全く彼の運である。と云ふて決心が固かつた。夫が爲め時機を後れず大に経過がよかつた。此苦悶時代に於ける内的經驗は澤山あるが、後になれば親の慈愛さへも感せぬ石の様な苦悶に陥つたけれども、心の底には親と云ふ考が潜んであつたものゆゑ、輕々しいことは爲なかつた。其時の感じを書いたものがあるが親の事を心配して書てある。又大經の第五惡段を讀んで、一言一句皆自分のことを書かれた氣持して深く懺悔した。父母教誨すれば目を瞑らし怒り響ふと云ひ、譬へば怨家の如し、子無きに如かず、などは、胸に針をさされる氣持がした。たしかに苦悶時代を泳ぎ付けた唯一の生命は親であつた。そして之を保つて呉れられたは全く親の念力であつた。かくして初めて佛陀の慈悲が心の中に生きて下さつた。夫から二三年間は恰も苦悶の反動として、非常なる確信の上に打立つて仕事をやる様になつて、親にしては又も心配させることになつ

た。世間では善いと贊めてくれる人もあれば、悪いと非難するものもあつたが、親の心では善も悪も超絶して唯々法の爲めに其所信を貫徹させたいの一念より外はなかつた。明治三十年より三十三年までは我信仰を確立し、又信仰の力を實驗した時代であつたが、此世に於ける唯一の生命は親であつた。

三十三年航西の時殆むど生別の覺悟で別れたが、其別れるときに實に勇ましく、最も屈托ない顔をして十分やつてこいとていはれたとき、初めて我親はあれ程決心の潔い人であつたかと大に驚いた次第であつた。サレド予の航西中は一寸の間も面白いことがなかつたと後にて話された。航西中の宗教的經驗は經文を味ひ、之を活かして行ふことであつた、其大体は信仰の餘瀝の附録にしてある「讀經餘瀝」に書きて置いた。かくなる源は父より授かつた三部經の點本を西洋へ携帶したことであつた。猶一層もと思へば全体親は經文が好きで、私か七歳の時自分が阿彌陀經を數行かきして私にも數行書かして、みな寫さして下さつた、是も昨年發見して、坐ろに親の慈悲を感じた。又十一二歳の頃、特に大なる三經の點本を求めて、之を訓讀することを教へて下さつた、其時養ふた習慣があらはれてやがて西洋に於て經文を味ふ様になつた源である。全体西洋の宗教事情を取調べた所て、宗教其物が違ふ故、之を佛教改良の參考にするには、佛教夫自身の上になつた根柢を見出さねばならぬ、而して經文はたしかに根柢になつたのである。かく西教を視察をして之を佛教の上に應用する生命は又親より賜はりた。經文は信仰經驗の塊であつた。

たら前にも云ふた通り諸根悦豫で身體中が嬉しいと言はれた。

歸朝已後今日まで三年間は細々と傳道に従事して居る次第であるが、此間には内心に於て色々の經驗をした。他日詳しく話す機会があらうが、極要點を言へば行と云ふことが分かる様になつた。政教時報百四號の社説に書きて置きた五臺山の佛陀波利、普陀落山の慧萼などの事に感じて、自分も幾分か人生上に於て之を經驗した。即ち行によりて佛の力を感得すると云ふことが分つて來た。抑々前々からの宗教的の經驗を纏めてみれば、三十年の苦悶時代より三十三年迄は信仰の基礎を置きた時代である。夫より已後一生の間は色々の方面より經驗を深める事と考へて居る。即西航中經文を味ふ様になつたは教行信證の中の眞實教の味である。然るに教の眞體を簡潔にしてみれば行になるのである。華嚴經は普賢行願品に收まり、法華經は安樂行品に收まり、般若文殊の徳は尊勝陀羅尼に收まり、觀音慈愛の徳は大悲心陀羅尼に收まる。そして此等の行は夫々の教にあらはれたる佛菩薩の力を感得することが出来る、此諸佛菩薩の中心たる彌陀佛の教は又南無阿彌陀佛の不行の中に收まる。故に此一行は即ち諸善萬行の精隨である、即ち念佛は無碍の一道であると云ふことが分かつた。而して其行と云ふことは即ち佛の力であることが分かつた。してかく道理づめに悟つたのではない、人生實際の問題の上よりして非常に苦勞して、確かに其佛の力なるものを實驗した、是れ即ち眞實行の意味となる。コゝで初めて法然上人の念佛一行を標榜された譯も分かり、親鸞聖人が其佛の力

ると云ふ考より釋尊の傳なども大に味ふ様になつて來た。又他人より御覽になつてはつまらぬ話なれど私には大に感激して居ることがある。遠慮なく打明けて話すが、タシカ私か高等學校に居る時分であつたと記憶するが、一日父が弟に向て私に堅劍か柔術を習はして置きたい。何んとなれば他日洋行する様なことがあつたとき、私は力か弱く身體が小なる故に西洋人に侮られてはならぬからと云はれたとの事であつた。

私が歸省したとき弟より之を聞きてサテは「親だわけにも程がある、我には他の人とは異りて洋行すべき機會もあるべき筈もなく、又すべき望もない。夫にかくの如きことを言はるゝは可笑しき事であると考へた事であつた、久しく此事を忘れて仕舞ひ、西洋に往き乍ら一度も思ひ出しもせなんだか。一昨年の二月四日未明伯林の宿で床に居る時に、フト其事を思ひ出した、其時の感慨は實に甚だしいことであつた。思ひ回はせば十四五年前の事、勿論何も彼是云ふべき程の事でもないが、時勢の變遷によりて、親の言はれたる通り、カク萬里海外に居ることになつてあるかと考へたら、親の慈悲やら、佛の御恵みやら胸に塞がつて感涙に咽び、迎ても横臥して居る譯にゆかず、早速床より出て、口を嗽き、顔を洗ひ、滿身の感謝を以て大經を訓讀し初めた。上卷半分程を讀むて、夜が明けて學校へ往くべき時間になつたから出掛けた。其日正午宿へ歸つたら、日本から急用があるから歸れと云ふ電報が來てあつた。何用か分からねど、此朝の所感が強かつた爲めに、道理理屈なしに早速歸ること、決心して直ちに出立した次第である。三月廿四日長崎に着したとき電報を打つ

を信する信を以て受けられた譯も分かつた。三十年の時經驗した信仰即ち眞實行の有様は之が爲めに最も明瞭になつて曠異抄第二節の「念佛して彌陀に助けられ参らすべし」と、よき人の仰を蒙りて信する外に別の仔細なきなり云々」と云ふ意義はますます明瞭になつた。今迄は信仰と云ふことは一點のゆるみなく喜んで居たが、念佛と云ふことは十分分つて居らなんだが、今では此大行の味が分かつた、二三年來の靜觀録を反覆して御覽下さい。畢竟此經驗の外はない、是が爲め從來教條的專ら教權的になつてあつた十七、十八の行信關係が實驗的に明瞭になつて來て、隨て從來こじつけの様にか思はれなんだ法然上人と親鸞聖人との關係も、なる程かくあるべき筈と考ふる様になつた。かくて從來左程にも思はなんだ教行信證なるものが、非常なる意味深きものとなつて、佛教の眞體を實驗する經過に於ける必然の範疇であると考ふる様になり、從て教行信證の御延書を非常に渴仰することになつた。かく私が自分一人で苦勞して佛の力を經驗した様に思ふて居たが、私がかく色々と經驗しつつある間、故郷の親の様子を懇々聞きてみると亦全く同様に我がために念じて居て呉れられたのであつた。魚が卵を孵化するのは其念力であるときいて居るが親は息の切れる時まで徹頭徹尾子を護念して下さつた。

諸全体私は性來習慣であるか是も親の養であらうが、佛が實在して居られ、極樂が現存してあると云ふ觀念が深いので、七寶莊嚴の淨土が嬉しいのである。或時清澤先生が善導さん風じやと云ふて笑はれた事を記憶する。されど私が信仰を確

立した時に罪惡觀ばかりで、無常觀が伴はなんだ。ルチニ病の時なども一命が危ふかつたのであつたが、唯自己の罪惡の爲めに苦んたので、阿闍世王の慚愧の心は十分あつたが、未だ來墮獄の事を考ふる餘地がなかつた。夫が爲め信仰を得た結果、平素佛陀の慈光に接して喜んで居つて、死んだら益々親しく如來に接することに疑はなかつたが、平素常に夫を樂むと云ふ様にはなれなかつた。是はたしかに罪惡觀から入つて、無常觀から入らなかつたからである。考へて居る。修行信證の證の味が十分分らないだ、しかるに此度は親が事實を以て之を教へて下さつた、前に十分書きたから御承知下さつたこと、信する。從來は信仰の方面を強く云ふため平生業成即得往生の意義は十分に分つたが、動もすれば一益法門的になりそうであつた。光明中の生活とか、淨土の實現など云ふては居るか、此人生の上では十分の所には達せられぬ。舊來の信者が極樂往生の觀念が主となりて、人生の事を度外に置く弊を矯めるために、青年の信者は人生上の安心を強く言ふはよけれども、未來の觀念に乏しき弊がある。私の如き生來七寶莊嚴の淨土も嬉しがつて居乍ら、猶適切でなかつた。然るに此度はたしかに之を實驗した。ナルホド親鸞聖人が彼土得生の眞實證を説破せられた意義が明らかになつて來た。宗教の極致は現世に於ては決して理想の極に達することが出來ぬことが分つた。信仰の上よりは常行大悲の徳によりて出來得る得り人の爲めにも謀り、佛の御慈悲を傳へたいとは考へて居るが、此世に居る間に爲す丈位は實に聊かの事である、

風尚餘韻

求道賦

びくりにん

幽遠き深き谷の底、
日も照らず、月も及ばず、
憂悶はいづれ常暗の路、
脚絆血浸み、足破れて、
人よ、知んぬ、爾が長き旅、
いみじく殺けたる頰の憔悴に、
幾許の艱難も偲ばゆるを、
語れ、抑も何處より何處への道。

暗か、夜か、無明の彼方、
星また、かぬ黄泉に出て、
音なき流、「時」といへる、
曠野練り行く際涯はるか、
行衛白波亦暗に入りて、
花も笑まず、鳥も歌はぬ、
岸邊の苔の針の葉末に、
波打つ飛沫危ふく宿りて、

眞實の衆生濟度などは思ひもよらぬ。一旦淨土に入りたる後、再び此世界に還來して、永久に普賢の徳を行ふ境に達して理想的の衆生濟度として下さる事が實に嬉しい。慈悲に淨土聖道の區別ありて、聖道の慈悲は此世にて人をいとしがり、はぐむことなれど淨土門の慈悲は淨土に往生してから、六趣四生何れの業苦のあるところにて、自國自在に濟度することであるといふ、還相回向の意味が明らかになつて來た。我父も今では此境に入らせ貫つて園遊戯の功德を行ひ、我々の爲すことを見て居て下さること、何となく生みの親は永久の親となつて下さつたことを信じて居る。かくの如く死後までも私の信仰の實驗を興へて下さつた大恩は忘るゝことは出來ぬ。

猶眞佛土、化身土に對する經驗もあるが、是はまたく味はひたいと思ふて居る。勿論已上書きた眞實信及び眞實の修行證の味もつと深く味から發表するつもりであつたが、父が私が宗教的經驗の上に加へて下さつた念力の大きなを披瀝せむと思ふて、思ひ出し次第に書きました。思想が纏つて居らぬので讀者諸君に向ては恐入る次第で御座ります。

明治お伽噺 巖谷小波作
明治お伽噺は十二編を以て完結とす、今寄贈せられたるは第八編にして十二支の物語也、曾て少年世界に掲げしことありと云ふ。新裝の此編を編きて新たなる感興の湧くを覺ゆ。(定價十二錢)(東京 博文館)

われ名を「露の命」といふ。
露とてねなむ水の滴、
名も永劫の「時」の仰、
暗の苦地の葉末轉びて、
碎け消えなん命惜しきを、
荒れ草、荆棘、岸に蔓る、
道なき道を河に沿ひて、
せめて知らんや、流の窮、
時の故里、命の家居、
焦れて來つる行程八千、
凝視め、凝視めて、凝視むるかぎり、
行く手、越し方、左手、右手、
あゝ、夜よ、暗よ、ぬば玉に、
焦慮の心、呼吸に荒れて、
吸ふは烟か、踏むは雲か、
手もて拂ひ、足にしだきて、
悶え苦しき求道の初旅。
岩根、嶮々しく、爪を剥がれ、
沼地、危ふく、泥に溺れて、
餓えては食ふ、祈禱の握飯、
渴きて啜る、悔恨の苦汁、
人里遠く行き暮れて、
片敷く熊笹、夢寒むき、
人の世の旅、物の數かは。

傷む心を胸に抱き、
血浸む靈を脊に負ひて、
走る常暗一とすじを、
救済こがれて行きまどふ、
見ずや、命に汗滴りて、
疲れ苦しき草の床に、
幾年、幾夜、夢を冷し。

劫億万里、「時」のきはみ、
注ぐ大海、名は「無限」、
限り知られぬ命堪えて、
常盤の靈の波の蕩搖、
水金色に、空は紺青、
法の大船、真帆をあげて、
呼はずや、聖者、聲音崇く、
「光明こゝに、救済はわれに」。
理想の綱に信を繋ぎて、
進め、旅の兒、手繰りて前め、
猛者の刃物かの障礙なす、
道の罪草、鋭く切つて、
面もふらず、真直に暗行け。
暗は道なり、罪は旅なり。
知れや、道なき道ぞ道。
見ずや、罪なき罪ぞ罪。

道なし、こゝに道を戀ふ。
罪あり、こゝに悔恨に泣く。
あゝかの戀と、この悔恨と、
連れ糾ふ綱に縋りて、
勇ましい哉、求道の旅路。

されば罪草足に絡みて、
餓えたる命、起きも上らず、
血汐溢るゝ心の傷を、
抱いて、泣ける旅の夕暮、
無情ぞ、吹くや、痛き「嘲笑」の、
風「誹謗」の吹雪捲いて、
切るよ、刺すよ、氷の鞭杖に、
涙も凍り、血も冷え果て、
聲、力なき、上ぐる悲鳴も、
無慘や、冷笑の反響にかへりて、
痛恨！命絶えなん刹那、
霹靂！聞け、聞け、暗を破りて、
朝々なりや何の玉音、
「兒よ、起て、罪知る、道知るはじめ、
幸多かれや、貧しき心」。
あゝ罪知るは道の初めか、
蹶起、勇奮、念をこめて、
仰ぐ晏天りに祈れば、

身内より急に悔恨の焰、
燃ゆるは「信」か、—— 焼くは誰ぞ、
慈悲よ、彌陀よ、愛よ、御神よ、——
凍れる涙、復ひ解けて、
冷えたる血汐、ふたゝび沸けば、
脚絆引き締め、草鞋踏みしめ、
凜としてまた衝く、暗路一とすじ。

あゝ麗はしき哉、爾が悔恨よ、
あゝ勇ましき哉、爾が信や、
悔恨は火なり、力なり、
信は血なり、涙なり、
かの火ありて、この血燃え、
この涙凝り、かの力成る、
あゝ肉を焼き、骨を燻べて、
幾年悔恨に薪すとして、
殺げたりな、爾が頬を祝へ、勇士
世はぬば玉の旅の行衛に、
やがて近づく靈の扉を、
漏るゝ光明、暗を破つて、
希望傳へん幸ある刹那、
いみじき慈愛、光まばゆく、
先づ輝かん、其處に、憔悴に。

さなり、憔悴を水に寫して、
岸邊の瞑想、涙下れば、
「時」音もなう、聲も流の、
水面やさしき紋の漣波、
うれし、晴けたる影の頬にも、
微笑の小波、しばし宿りて、
また消えて行く、無限の流。

そが紆り行く暗路はるか、
眼袂展く、曠野遠く、
道、涯なし、旅、希望ある、
夜の傾、はるか、彼方に拜む、
祈念凝らして、臉を閉ぢて、
「遠さを畏れじ、只願はくば、
眞の道を辿らしめよ」
暗の曠野を横に細う、
また暗に入る似而非道いくつ。
罪なり、似而非人、小賢しくも、
道を得たりと誇らしきよ。
岸邊の蘆に「刹那」吸ひて、
螢火瞬時の怪しき榮え、
不幸よ、黠奴おほけなくも、
光明これと嘲み示す。

藪の小陰に刺を隠して、
嘲む小菊の足刺す如く、
愛しや、渴仰祈念の領に、
籬破つて園の外より、
冷嘲の花、枝を誇るか、
祈禱の兒等の眼を刺る。

杉の茂森、木立の暗に、
見るも佞奸、毒盛る姿、
椿、眞紅を黒う濁して、
胸刺す色を、あゝ、また不幸や、
宗教の庭に、神よ、泣きませ、
嫉妬、謀陰の醜花茂る。

宗教、嘲罵の犠牲となつて、
求道、偽善に眞を興ふ。
健なれ、勇なれ、力あれ。
聞かずや、暗夜を警しめ給ふ、
豫言者の聲に潤帯びたり。
法敵内外魔を荒ぶ、
聖教無残！毒牙の禍害。

博士は講座に宗教を詛ひ、
僧侶、祈禱に信を弄す。

この時、この世、求道の勇士、
行け、々々、猛く暗を走つて、
その道眞直に聖者の許に。
やさしき慈愛の御膝に縋りて、
泣いて宗教の艱難を訴げよ。

藪澤、魔あり、血を吸ふ獸、
旅の兒、捕へて、いみじくいひぬ。
孽惡の相、笑を湛えて、
粗手に肉をあざみ嘗めつゝ、
「何を慕ひて、人よ、走れる、
泣いて求むる、汝の彌陀は、
見よ、見よ、わが腹、已に肥やして、
只一片の肉のみ残る」と、
残まし、朱の舌、長く吐いて、
喉を鳴らして、貪り嚙みて、
「いくその血汐、幾許の涙、
疑つて、宗教の肉、甘まや、
祈禱、讀經の調味、加へて、
大杯、信の血汐、あをれば、
酔ふたり、法薙、興に乗りつゝ、
圓顛危ふく、鉢巻加へて、
舞ふや、颯々、緋衣の袖風、
爪繰る味敷音、拍子、静かに、

宗教の肉に舌うつ獸、
痛嘆！僧よ法の弟子よ！

緩う、長う、長閑に歌ひて、
毳く木魚の調子、輕快、
高く、短く、輕く、笑へば、
紫庵、竹椽、横に疲れて、
春の日、長う、肘を枉ぐるを、
憂悶の旅人、わが名を知るやと、
伸ばす前足、顎を支へて、
舌なめづりて、われを冷笑む、
堪んや、君よ、足を提げて、
力の限り、醜魔蹴りしか。
怨恨、忿怒に腸沸えて、
熱涙たばしる瘡せたる顔を、
双手に掩うて祈り崩れし。

あゝ、弘法濟度の五十年、
長き艱難の數を盡くして、
いま入りまさん涅槃の際に、
幾億万の後を偲ばせ、
説かし、世尊悲痛の御言、
怨ぞ、末法已に近づき、
三千年の時の下流に、
早くも偲ぶ、あゝ、法滅盡經！
虫あり、老木の幹に巢くふを、
才ある學者、何と名づけけん、

深林、魔あり、蠶魚食ふ獸、
練瓦の城塞、高くしつらひ、
小さき望遠鏡を河に向けて、
小賢し、流の末を窺ひ、
笑止や、上流、源を索る。
水上、はるか河の透曲に、
岩に激する泡沫、白う、
暗に微かに懸れる、見れば、
望遠鏡をおいて、胸を反らして、
源これよと、誇り語る。
下流、天さがる空の邊、
河床廣う、陸と流の、
堺界、波路の連る、見れば、
髯を捻つて、卓を打つて、
海原其所ぞと、賢く示す。
白墨と塗板、巧みに手捌き、
フロックコートに、襟は掛けて、
宗教を載する俎の上、
取るや、冷やか、解剖刀に、
切るよ、刻むよ、裂くよ、剪むよ、
抜き取る骨片、秤に量り、

引き出す臟腑を、顯微鏡に照らし、
 開解を加へて、反身にいひぬ。
 「信と迷信、重量は同じも、
 差別は機官の排置に因ること、
 玻璃瓶、いくつ、藥劑の水盛り、
 五官を浸して、棚に飾りて、
 書架より取り出づ分類表を、
 仔細のありや、捻り撥ぐらく、
 得たりと書き込む統計表を、
 獨り微笑む、何の會得ぞ、
 「宗教の老翁、見事、総りて、
 屍骸に學位を購ひ得たり」と、
 淺まし、聞くに胸も潰れて、
 堪んや、獸の怪しき毒氣、
 涙に潤む眼、見張りて、
 講堂、いふせ窓のあなたを、
 行衛も知らず、河流に見入りし！。

あ、パリサイの舌軽く動いて、
 傲然、道を弄ずる傍、
 ナザレに十字架、空に聳えて、
 あ、赫たり光明、四天の外に。
 何の世絶えんや外道の毒牙、
 小賢し、蠅螂斧を揮ふも、

彼は西の都に寂しき生活をしてをる。わがなほかしこにあつた時は日となく夜となく互に顔を見ねばすまぬといふありさまで、花といひ、月といひ、四季をり／＼のながめにはかつて我等二人のかげが見えなかつたことがなかつたのである。

其の時分には彼もわれも共に浮世のわづらはしきことは少しも知らずに、たゞ世の中は常に花や月で飾られてゐるものである。われらはたゞ樂む爲にこの世の中に生れたものであるといふやうにもふてゐたのである。

ところが火宅の様な世の中はいつまでも我等二人をして満足なる運命の上にあゆましめなかつた。丁度今より二年前、彼はつひに一家殆ど、滅落の悲運に際して涙をふるつて田園の内にさすらふべき身となつた。

そのをりの彼の手紙——これは多くいふにしのびぬあ、何故にこればかりかく涙多いのであらうかとは彼がつねに我に語つた套語であつた。

彼が家の没落といふのは決して普通のことではなかつた。彼は早く既に父を失つてその母と妹二人と末が弟、この五人暮してある。その頃は可なりの財産も持つてをれば日常の生活に不足はなかつたのである。然るにふとしたことより、彼が慈善の心はその知人の危急を救はんが爲にその経験なき手で以てその同情の涙をそゝいだ、即彼が常に思ふてゐた通りその義心が自己一身の幸福をかへり見るにはあまりに強かつたのである。今や彼が義侠心は勃如としておこつてその知人を救ふべく一切の責任を荷つてたつたのである。

孤雲

沾 泉

春はいづこも暗に御座候、枯れはてたるやうなりし櫻もいつしかふくらみ出で、花さきにほひ候はんも近かるべくと存候、まことに慈光は至らぬくまなく、見るもの聞くもの一として感謝せざるべからざる儀に候。
 これはわが友の最近の書信の一節である。余は彼の手紙を見るごとに常に一種いふべからざる歡喜の念におそはれるのである。而もこの歡喜の念の裏にはまたいふべからざる悲慘なる聲があり／＼とわが耳の底深く響くのである。

而も不幸にして彼は全く欺瞞せられたのであつた。彼が同情の心、義侠の念は巧にその相手に利用せられて彼が父祖傳來の資産は殆ど全部をさげられて報酬なき事業の爲に消費せられてしまつたのである。

これが爲に彼はその久しくすみなれたる故郷をあとにせねばならぬこととなつた。車二輛に山積したる家具とその母及弟妹、たゞこれのみが彼が移住のときの全財産であつた。

彼は今にしてその全く欺かれたことを覺へたけれども、それは最早おそかつた。いかに義侠にとめる同情にとめる彼といへども、その義侠その同情が少しも義侠として、同情として他人に向つてあらはれてゐないのを見たときは無念の涙をしのびえなかつたのである。その母及弟妹は、殆どかの欺いた知人に對してよりも欺かれた彼が義侠、同情に對して多大の怨恨を齎したのである。彼が内外の苦惱の餘り、世をうらみ人を罵つたのも實にこのときであつた。

かくして彼が今日のあはれなる境遇とはなつたのである。その内に我はやむなく百五十里をへだてた東都の人となつてしまふて、また昔の如く彼を慰めるべき多くの機會はないのである。

彼はその後の境遇を時々しくはしくかいておくつてくる。けれどもこれは却て我にとつては涙のたねにかきなんだ、今彼が居るところといふのは、全くの片田舎で、そこには、湯屋が一、菓物屋が一、寺院が一、この外にあはらや十數軒、その四邊は太古の面影ある藪や、林や、田や、畑がひろ／＼としてつらなつてゐる。而もろの東北の方にかのなつかしき藪を

初め三十六崙がのどやかに見えるのである、あゝこれを見か
れを思ふにつけても彼が心の内にどんなであるだらう。
その後彼はなほそのうらわかき身にあらゆる困難と戦つ
た、彼はそのかよわき手一つでその家族を支へて行かねばな
らぬ。而もこの勞働は到底之れに應じきれななだのである。
故に彼はその家具、衣服の類をうるべく餘儀なくせられた、
されど彼は未だその書冊に手をつける程までには至らなかつ
た。ところがかゝる生活の第一年をすぎた頃、彼はその生涯
の同伴ともちもつてゐた書冊をまでもその糊口、而も五人の
糊口に與ふるが爲には遂に人手に渡さねばならぬこととなつ
た、彼が今日までの幾多の困難はなほ思ふべきであらう。而
もこの一事だけは到底しのぶことを得なんだ、そは彼が書冊
はかれが全生命である、彼は早く既に學問を以て世に立たん
とさへ決してゐたのであつた、彼は殆ど、自の存在を疑ふま
でに落膽したのである。その書簡によれば彼が涙はまことに
紅の血しほをそゝいだのであつた。而もこの瞬間に幸にも彼
をして奈落の底より救済してそこに一道の光明を認めしめ、
今までの苦悶、幽僻のかけをして全く霧散せしめたものがあ
るのである。これ實に彼が宗教ことに佛教に向つた一事であ
る。

この一轉機は實に彼をして直に光明赫々の世界にその心を
はせしめ、現在以上に超然として空有の境に達せしめたので
ある。これよりして彼が困難の生涯もなほそこに多大の希望
と勇氣とを感じ、欺瞞せられたる彼は却て之れを以て感謝す
べき佛陀の慈悲なりと觀じたのである。彼は云つた、自ら人
を陥れしにあらざして人より陥れられるのは幸なることであ
る、蟬蛻の如き定めなき人生に幸にこの小なる我をしてわが
力以上に知人の困難をすくふことを得しめたまひしはこれ偏
に慈光のみらびきに外ならぬといつて深く感謝したのであ
る。

かくて春はめぐり、秋は來り、地上の風物、各消長ある内
にたちて、彼は今や依然としてその光明裏に住することを受
る身になつた。今や彼が心中には世の中のいづこにも一の怨
嗟もなく、一の憤怒もなく、一の愚痴もないのである。たゞ
その心の眞のおくそこに泉の如く湧きいづる感謝の念の外何
物もないのである。

友はその自の尊き默示をその母及弟妹へかたつた、而して
また彼等に向つてその同じ慰めと感謝とを分つべくえしめた
のである。

春風ゆたかに采圃をめぐる頃ほひ、これは京都の田園に手
なれし鋤を手にして續紛たる間に靜に慈光のかけにたよつて
耕しつゝ、転りつゝある彼を思はざるを得なかつた。而もそれ
はかつて多大の怨恨と悲愁の調とを以てかたつた彼ではな
く、光明の赫々として一切の差別相を絶せる彼であるのでは
ある、この尊き彼にはよしやいかなる困難、苦痛、悲哀、怨恨

がひしとよしよせて來ても彼はたゞ微笑を以てかろく之
れをむかへたであらう。而してそこに常住の生命をみとめた
であらう。(了)

釋尊降誕の日に

波岡茂

芙蓉ほろ／＼地に落ちて
冬より寂しき人こゝろ
大聖茲に生れまして
天地ひとしく新呼吸
光明と暗黒のいさかひに
平和自由の日に弱く
有史このかた數千年
人の子もがく死のみ淵

大聖一度呼吸をあけ
不斷の風に薫りあり
暗きを迎る人の子に
生命無窮の光明あり
吾か世是より晨には
東を飾る曉の星

夕は西の夕づゝに
力と榮光の啓示充つ

あ々今日の日を祝かんとて
鳥は囀り花笑むを

生命を享けし人の子の
歌はさらめや今日の日を

草衣

十郎

ふれ雨、さらば嵐ふけ、
高嶺に雲は狂ふとも、
これ豈春にそむかんや、
あたゝかいかな、わが心、

見よ光なき谷かけに、
岩ほは青く苔むして、
千尋のゆめのたのしみに、
なほ春、わかくほゝゑめり、

世をのがれたるわび人の、
かさねの風はさむくとも、
そこにも匂ふ紫の、

すみれの花に春をしれ、

春はみ光とことばに、

うれひの雲のなかれとぞ、

野山をつゝむそでの香は、

この人の世にあまねきを、

あゝなゆゑに沅湘の、

古人はこゝろせまかりし、

世の波々をいとほんに、

不捨のみ光ふさはじや

政教時報

日曜講話

▲二月廿八日(第七回) 甲府の太田秀穂氏再び来りて有形の勝利、無形の勝利の題に就て、一時間あり講話せらる。要は有形の勝利も必要なるが、精神上の安慰を得る無形の勝利の一層必要なることを述べられ、修養の一日も怠るべからざることを語られたり。近角氏の講話もある筈なりしも、本日は例によりて茶話會あるを以て、時間の都合上見合せられたり。直に茶話會に移る。

▲談話會(第二回) 出席者五十餘名にして、或人は非常なる厭世觀に陥り、家を逃れて山寺に身を托し、一生を終らむとせしむる經歷を語り、又或人は社會の冷酷は以て渺たる五尺の身を容るゝ所なく、屢々自殺せむとせしむる時に際し始めて佛陀の廣大の慈愛を承り、今は安慰を得て其日々の生活を續くことを得たりとて涙ながら感謝の辭を述べぬ。談話といへば、教理や、研究の理論めきたる話のみなれども、此會は各自の實驗談のみにして多く懺悔の意の包まれるが如し。且つ實驗的なるを以て飾りなくして、流石に宗教的感化を受けたる心地せらるゝやうれしき。

▲三月六日(第八回) 佐々木月穂氏は救済論に就て語られたり。曰く、如來の實

ため、平和の爲め永遠の理想に進まんとするには戦争に因つて障害を除かざるべからず。古へより、無名の師は起すべからずといひし如く、大義名分ある戦争は絶對に非認すべきものに非ず。釋尊は菩提樹下に於て悪魔と戦ひし如きは、正に是れ精神上の戦争なりと雖も、以て佛教の眞精神の在る處を知るに難からず。況んや佛教には已に逆現象あり、拆伏あり、抑止あるに於てや。眞理に達するに際害ある以上は、戦争又必ずしも避すべきにあらず。然れども仁義の戦争ならざるべからず。云々一時間余に渉りて氣を吐かれたり。先回の日曜講話には上杉氏の戦争觀あり、今齋藤氏の戦争觀あり。時節柄聽者に取りては頗る有益なる講話なりと云ふべし。

彰化學堂(滿國泉州府)

同學堂昨年の概況の報に接したるを以て左に掲ぐ。學長は田中善立氏にして、兵尙少壯、銳意熱心之に従事し、漸次盛運に向ひつゝありと云ふ。

昨年三月豫修科卒業生一名、臺灣總督府の國語學校師範部へ留學を命ず。年餘十四才學業最優等、是れ泉州府より海外留學生の嚆矢たり。

昨年三月新學年を開始す。科を分ちて豫修甲乙丙組とし簡易なる高等小學校程度の普通學を教授せり。

在學生は甲乙丙組合せて五十有八名にして日々出席生平均三十七八名なりき。全學年中授業日數總て二百二十四日。

本年一月より學年試驗執行、二月四日終了す。豫修科卒業生六名、全乙組修了生二十餘名、他は落第生なり。

教職員は堂長一人、教授二名、教習一名、書記一名の制なれども堂長は教授を兼ね居る故日本人教授他一名にして、教習即土人教員一名は書記を兼ね現令職員三名なり。

以上は大體の報告なり、北滿廣東地方學堂に比して遙かに劣等の地位にあり。當地は他に比して開明の程度卑きと一般に日本語の必要を感じざると、一は儲者連中には今尙領事當時の恨を挟み居る事の諸原因によりて、斯くは遅々たる状態にあり。されど今日には官民共に餘程信賴の念を生じ、經費にあらば私立中學堂として認可さるゝ機運に向ひたり。只惜むらくは經費の都合上直に之に應ずること能はざるを。

新に寄贈せられたる雜誌左の如し

- ▲日曜講話 基督教の雜誌なり、
- ▲北門の佛敎 函館より發刊、武宮環氏主幹せらるゝと云ふ。
- ▲白百合 函館中知らざる婦人に實驗したる記事あり、危き事ともなる哉、
- ▲新生命 文學雜誌なり、
- ▲修養 青年會の雜誌也、

在を信つゝ然かも親しく救済の手に觸るゝこと能はざる人はまた、餘裕のある人にして、身の上がたしかに知られぬ爲めなり。船が覆へり、乘客が浮きつ沈みつする生死の間にありて、船長の如來たるものいかに、救済の御手を下さざるを得むや。唯々我等は無我となり、無心となり、始めて佛の救が身にしみくこと感ぜらるゝことを説かれたり。次に近角氏は佛は障礙する所なき旨を詳説して、今日の講話を終へたり。聽衆増減なし。

▲三月十三日(第九回) 楠龍造氏は讀史雜觀として述べられたり。記者は用事の爲め同氏の談をきくことを得ざりき。次に上杉文秀氏は佛教の戦争觀として、戦争を侵略主義、平和主義の二となし、さて佛教は(一)殺生を戒む、眞宗を除いて外の宗旨は皆それ、戒律を保つ故、此主義より觀れば戦争は絶對に非とせざるべからず。(二)殺を行はざるにあり、之を天台大師は愈々殺にして愈々慈なりとせしめて、佛道に入るには殺も免るべからずとせり。此見地よりすれば戦争必ずしも不可ならざるが如し。(三)身を殺して仁を爲すと云ふか如く、時として自身を犠牲に拒むべからず。同く戦争にも平和と侵略の二種あるは古來の歴史より觀ても明なり。されば尼乾子經の中には平和の爲め戦争をなすは妨げざるもたゞ戦争を行ふに慈悲の心を以て戦はゞ無量の功徳を得んも決して害なきことを説かれたり。されば此種の所説によりて戦争に對する佛教者の態度略ぼ察すべきなり。云々。

▲三月廿日(第十回) 第一席會我輩深氏は勇氣の本源に就て述べられたり。曰く、世の人多くは因縁をばあきらめと思ひ、何事も因縁つくと考へて、總ての事を運命にまかせると思ふは太いなる間違にして、因縁なるものは決して斯の如きものにあらず。更に此因縁によつて大なる勇氣の存在するものなる事を説き、一例を擧げて、會て下駄のはいれを業とする一老翁あり。其手腕には、然れども一日誤りて下駄を傷つゝけて再び用ゆるによしならしむ。人之を責む、然れども老翁頑として下駄はかやうの因縁によつて破れたるものにして、己が手腕の拙きの至す處に非ざるを辨りて總てざりき。是即ち因縁なるものは、あきらめにあらずして、勇氣をますものなり。運命にあらずして、必然的のものなるを證するものと云べしとて、反覆詳論せられたり。第二席齋藤唯信氏は戦争より見たる佛教と題して、先づ佛教の教理より説き起して佛敎には逆現象と順現象との二門あり。眞理に到達するには如何なる障害をも排除して進まざるべからず、之を逆現象と名付くる所以なり。之に反して正義の道を正しく進み眞理に到達するを順現象なりとす。而して佛敎には更に悲智の二門を説き大慈大悲によつて一切衆生を攝取して捨てざるといふは佛の本願なり。されど一面よりは唯除五逆誹謗正法の者を救はざるは是智慧の門にして、日蓮宗の如きは拆伏攝受の二門を説き、眞宗の如きも抑止を説く所以也。今戦争は勿論非なる事は論を待たざるも人道を無視し、平和を擧げざるものを打撃すに於て、戦争は絶對的非なりとするものに非ず。人道の

編輯餘録

- 滿都の士女は盛裝して花に戯るゝ候と相成候も、世は物騒がし折柄なれば長閑けき春も何となく、うら淋しく感ぜられ候。
- されば上野公園にて催さるゝ美術展覽會なども、人足少なく賣行も思はしからざる由に候。
- 出征軍人の遺族中路頭に迷ふもの尠なからざるよし。現に東京市中にても既に扶助すべきもの八百人もありと云ふ。されど中には扶助料を得て芝居見物に行く横着者もありとの事なれば、物質的救済は無必要なるが、此際遺族に對し心靈上の資糧を興ふること、洵に刻下の急務と存候。これ宗教家適切の任務に候はずや。
- 從軍布教師の多き中に管長として從軍されしは、鎌倉圓覺寺の釋の宗演師に候。兎に角異彩を放つ人と可申候。
- 池山榮吉氏は愈々徳香社を設け煙草店を開業仕候。
- 近角氏は去月嚴父危篤の報に接し、直に歸郷せられ候が、不幸にして手篤き看護も、藥石も其効なく、六十六歳を一期として去月十二日日出度淨土の蓮臺へ迎へ取られ候由。近角氏に取りてはいかばかり傷心の事と存せられ候。されどこの度の事によりて大なる實驗を得たりとて、喪中筆を執りて一文を寄せられ候。不取敢社説として掲げ置候。一語は一語より一句は一句より悲哀の霧に包まらる心地せられ候。ついで御覽被下度候。
- 日本新聞記者安藤鐵腸氏は此度其筋より從軍の許可を得たるを以て、近日戦地へ出發可致候。戦況以外の觀察は特に本誌上へ寄稿せるゝ事を快諾致され候。
- 西本願寺法主要方は先きに九州を巡廻せられ候が、今亦北陸地方を巡廻し、専ら時局問題に就て婦人の心得を示し、且つ奨勵に勉めらるゝ由。

◎軍國の帝國議會は無事に閉會を告げ候。而して議員秋山某に對する決議は四千萬人の目を驚かしめ候。

◎求道學舎に多年寄宿せられ候、山田友次郎君、大草慧逸君、(以上京北)久保護躬君(郁文館)山田喜六君(附屬中學)の四氏は此度中學卒業せられしを以て、或は商業學校、或は高等學校に入學せらるゝを以て、一は卒業を祝ひ、一は送別をかねて去月廿六日土曜會をひらき申候。兩山田君の如きは學舎設立の當時より入舎し居らるゝを以て、何となく訣別の情に堪わがたき心地せられ候。當夜は久しぶりにて名指、ラカン廻はしなどありて、盛に笑聲湧き起り、大に愉快を盡くし候。而して文科大學の鈴木卓苗君は、此度新に求道學舎の一員となられ候。

◎本號も記事意外に多く、近角氏の靜觀錄、青柳氏の米國だより、其他海外事情等は凡て省き申候。時正に不順諸氏の健康を祈る。不宣

| | | |
|---|-------|-------|
| 轉 | 小石川大塚 | 阿刀田令造 |
| 居 | 閑炎洞 | 吉川萬次郎 |
| | 窪町四十一 | 島貫彦次郎 |

父近角常隨儀去る三月十二日午後八時入寂仕候謹て生前辱知の方々に申上候

明治三十七年三月 男 常 觀 同 常 音

亡父存生中は御厚情を辱し、又入寂の際は御叮嚀なる御吊詞を賜はり、深く感銘仕候。茲に謹て御禮申上候

明治三十七年三月 近角常觀

廣告

◎德香社

は、廣く、内外諸種の煙草を販賣致します。

◎德香社

は、煙草の品質を保險し、且つ、特別の廉價を以て販賣致します。

◎德香社

は、遠近を問はず、多少に拘はらず、御注文に應じて配達致します。

◎德香社

は、營業上の利益を擧げて、悉く、社會的慈善事業に充用致します。

明治三十七年三月十八日開業

神田區須田町筋交ひ角(十四番地)

德香社營業部

德香社煙草店

電話本局二二〇二番

德香社主管 池山 榮吉

◎德香社は、追て(凡そ半歳後)事業部を開設し、社會的慈善事業(例へば労働紹介、失業者労働場、改良安泊、職工寄宿所、實業夜學校、貧民貸家等)を經營致します。
◎德香社主管は、衣食の費を、營業の利益に求めることは、致しません。

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

| | | | | |
|-----|-----|------|-------|------|
| 一部 | 一ヶ月 | 六ヶ月 | 一年 | 郵税一冊 |
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

◎廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年三月廿一日印刷
明治三十七年四月一日發行

發行兼編輯人 百目 木智 璉

印刷人 白土 幸力

發行所 東京市本郷區森川町一番地 (電話下谷二四三三)

求道發行所

大賣捌所 東京市神田區神保町 東京 堂

同 本郷四丁目 明 堂



譬如大海水一人升
量之一劫不止尙可
枯盡令海空竭得其
底泥人至心求道何
而當不可得乎求索
精進不休止者會得
心中所欲願耳

〔平等院經〕

